法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

安土・神学校(セミナリオ)の遺址

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	51
号	2
ページ	140-87
発行年	2004-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/6184

安土・神学校（セミナリオ）の遺址

宮永　孝

イエズス会の宣教師フランシスコ・ザヴィエル（一五〇六～五三）は、東洋への伝道を計画したとき、たとえそれまでに遭遇したいかなる危険にも増して、はるかに大きな艱難辛苦が前途に横たわっていても、[1]東方の国にでかける固い決意でいた。

一五四九年六月二十四日、ザヴィエルとその一行（司祭コスメ・デ・トレス、ホアン・フェルナンデス、アマドール（マラバール人）、マヌエル（中国人）[2]、アンジローら三人の日本青年ら）は、マラッカ（マレー半島の西岸の町、東南アジアにおけるイスラム文化の中心地）で「海賊」のジャンクに乗ると、[3]途中つつがなく航海をつづけ、一五四九年八月十五日（天文十八年七月二十二日）鹿児島に上陸した。

ザヴィエルは日本に滞在すること約二ヵ年余（一五四九～五一年）、どろ道を難儀して進むように、辛苦のなかで布教に従事した。鹿児島より平戸・博多・山口を経て都（ミヤコ）に入り、日本国王や将軍に拝謁し、布教の許可をえようとしたが失敗し、その後は豊後、島原・大村などで伝道したのち、一五五一年（天文二十年）十一月二十日中国伝道のために失意のうちに豊後日出（ひじ）の港をあとにした。

長い修道服（リタ―ナ）とマントを着たイエズス会士の図。［筆者によるスケッチ］

ザヴィエルの布教事業は、その後コスメ・デ・トレス（初代日本布教長）や日本退去後に来日した宣教師、修道士、さらにキリスト教に帰依した日

本信徒らによって継承された。サヴィエルが日本滞在中に獲得したキリスト教徒の数は、千五百名から二千名ほどであったが、布教が開始されて約二十年以後の一五七一年（元亀二年）には三万人、一五七九年（天文七年）には十万人、一五八一年（天正九年）には十五万人と飛躍的に増えて行った。[4]

一五七五年（天正三年）一年間だけでも、改宗者は一万八千人から二万人に達し、翌一五七六年肥前国有馬の領主アンドレア義直夫妻と領民ら一万五千人が改宗者となった。[5]しかし、この天正三、四年に日本に在住していたイエズス会員の数といえば、神父（パードレ）（padre）九名、助修士（イルマウン）（irmão）四名にすぎず、その後約三十年たった一六〇五年（慶長十年）においてさえ、イエズス会員数は百二十一名にすぎなかった。[6]

巡察師ヴァリニャーノ（1539〜1606）の肖像。

イエズス会が日本における布教活動において直面した大きな困難は、財政上の問題と日本人聖職者の不足であった。マカオよりイエズス会士アレッサンドル・ヴァリニャーノ（一五三九〜一六〇六、イタリアの宣教師）が、巡察師（パーテル・ウィシタトール）（Pater Visitator—布教先の事情を調査し、報告するために派遣される）として島原半島の有馬領口ノ津に日本訪問の第一歩をしるしたのは、一五七九年（天正七年）七月七日のことであった。[7]

当時、日本のイエズス会は憂慮すべき状況にあった。布教長フランシスコ・カプラルは（一五七〇＝元亀元年〜一五七九＝天正七年まで九年間在任）偏狭な日本観をもち、それに基づく誤った布教方針をとっていた。かれによると、日本人は傲慢、貪慾、不安定、偽装的な国民であるとし、かれらをけっして司祭にしてはならない、というものであった。そしてせいぜい用いるにしても同宿（どうじゅく）（伝道士、カテキスタ）にとどめるべきであり、ラテン語や神学校も無用との考えを抱いていた。[8]そればかりか、カプラルは日本人の信者を召使い扱いをし、[9]十分な宗教教育を行なわなかった。

ヴァリニャーノは、このカプラルの方針に大いに失望した。かれは日本人の協力が得られない場合、布教事業は失敗するに違いないと確信した。ヴァリニャーノは、日本の実体がよくわからないまま一五七九年を有馬領ですごし、同年暮れまでに新しい形式のイエズ

ス会報告書「日本年報」(Lettera Annua di Giappone)を作製させた。

一五八〇年(天正八年)三月、ヴァリニャーノは有馬領主鎮(ドン・プロタジオ)貴(しげたか)に洗礼をさずけ、将来その領内に日本人の聖職者を育成するために神学校(セミナリオ)を設置することにし、同年六月大村領長崎に移動した。六月二十四日、かれは「日本布教長内規」を定め、日本の布教区を都(ミヤコ)、豊後、下(しも)(大友領以外の九州一円)にわけ、さらに神学校(セミナリオ)、学院(コレジオ)、修練院(ノビシヤド)などを設立することにした。[10]

それまで日本人の伝道希望者は、司祭(パードレ)の補助者、助手にすぎなかったが、その後数十年間に司祭に叙品される日本人も誕生した。[11]邦人の宣教師を養成するために、イエズス会が創設した教育機関は、明智光秀の謀叛(むほん)による安土の騒乱やその後の秀吉や家康の禁教令などの結果、たびたび移動を余儀され、ついには日本の地からほとんどその痕跡を残すことなく消滅するのであるが、日本におけるキリシタン宗(カトリック教)の布教の歴史を知るうえで、その教育機関の沿革を知っておくことは緊要である。

天正から慶長の約三十年間に行なわれたイエズス会の各種の学校の創設と併合と移動について年代記的しるすと、つぎのようになる。

有馬の神学校および学院……教会とともに一五八一年(天正九年)に竣工した。当時、有馬の教会は九州第一であり、三つの広間を有していた。神学校においては二十六名の貴族(上級武士)の子弟が学業に励んでいた。一五八七年(天正十五年)安土の神学校と合併。

また有馬では、聖堂(教会)や司祭館に属する校舎として、キリシタンの子弟や少年児童のための「住院」(casa—寺子屋のようなもの)があり、そこでは日本語やラテン語で教理書や聖歌を教えた。[12]一六〇一年(慶長六年)ごろ、有馬には住院が十五、教会堂は十八あると日本年報[13]は伝えている。またそういった初等学校が増えており、子供たちは日本語の読み書きを学んでいるが、それは領主有馬鎮(ドン・プロタジオ)貴の希望でもあったという。[14]

有馬の学院……一五八〇年(天正八年)の四月か六月に開校。[15]一五八七年(天正十五年)安土の神学校と合併。のち移動と合併をくり返す。

キキナ(一五八九年=天正十七年)—有家—加津佐(一五八九年=天正十七年)—天草(一五九二年=文禄元年)—長崎(一五九八年=慶長三年)—有馬—長崎の学院と合併(一六一二年=慶長十七年)。

有馬合併神学校……(一五八七年=天正十五年)—のち八良尾(一五八九年=天正十六年ごろ)—加津佐(一五九〇年=天正十七年)—八良尾(一五九一年=天正十八年)—有家(一五九六年=慶長元年)—長崎(一五九八年=慶長三年)—有馬—長崎(一六一二年=慶長十七年)へと移動。

白杵の修練所……一五八一年(天正九年)臼杵城内に設立。日本人修練士六名、ポルトガル人の修練士六名、神父、修道士四名がいた。臼杵

の領主大友宗麟は、イエズス会と修練所のために庇護をあたえた。のち山口（一五八六年＝天正十四年）―天草（一五八八年＝天正十六年）―大村（一五八九年＝天正十七年）―有馬？（一五九一年＝天正十九年）―天草（一五九一年＝天正十九年）へと移動。

府内の学院……一五八一年（天正九年）に設立。当時、神父三名と生徒十名がいた。ラテン語のほか日本語が教授され、また欧州から来日する宣教師は日本語で会話し、かつ説教することができた。のち山口（一五八六年＝天正十四年）―千々石（一五八八年＝天正十六年）―有家（一五八八年＝天正十六年）―加津佐（一五八九年＝天正十七年）―天草（一五九二年＝文禄元年）へと移動。

府内のカザ＝ヂ＝プロバチオネ（予備校）……有家（一五八八年＝天正十六年）―天草（一五八八年＝天正十六年）へと移動。

府内（現・大分市）の学院（コレジオ）跡をしめす石碑。［筆者撮影］

安土の神学校……一五八〇年（天正八年）七月ごろに開校。のち京都（一五八二年＝天正十年）―高槻（一五八二年＝天正十年）―大坂（一五八四年＝天正十二年）―有馬の学院と合併（一五八七年＝天正十五年）。

山口の学院または神学校……一五八六年（天正十四年）末に、秀吉から許可を得て山口に設立。翌天正十五年には、生徒数十五名を数えた。のち迫害の激化とともに学校を廃し、また幼年の生徒は親許に帰った。[16]

わが国にはじめてローマ＝カトリック教の聖堂（教会）が造られたのは、サヴィエルが来日して四年後の一五五三年（天文二十二年）春のことであった。「天主教沿革史」（『増補長崎畧史』第十七巻所収）に、「天文二十二年春　豊後府内（現・大分市）に天主堂を建つ　之（これ）を我邦天主堂の創始とす」とある。

府内に造られたこの教会は、二十七年後の天正八年（一五八〇）十月、臼杵で開かれた会議の席上、イエズス会のヨーロッパ人や日本人神学生のための学院（コレジオ）に昇格し、翌年「聖パウロ学院」と命名され、学院として発足したが、わずか数年しか続かなかった。[17]

ともあれキリスト教の教理を教えたり学んだりする場としての広義の神学校が、わが国にはじめて創設されたのは、サヴィエルの来朝から二十八年目の天正九年（一五八一年）ごろのことであり、臼杵、府内、有馬、安土に設けられた。

つぎに邦人宣教師養成機関としての各種の学校の特徴と教育内容についてふれておこう。

神学校（seminario又はcasa residênciaともいう）……巡察師ヴァリニャーノは一五七九年（天正七年）およびその翌年、日本在住の宣教師たちとの会議の席上、学制改革案を説明し、日本人のための大、小の神学校（seminarium maius, seminaria minora）設立を計画し、日本最初の小さな神学校が三校、有馬、安土、山口に設けられた。有馬の神学校の場合、イエズス会士の有馬晴信から、かつて寺院であった建物と土地をもらい、二十二名の生徒をもって授業がはじまった。[18] また寺院の近くに小学校（小コレジオ）がつくられ、そこへ身分の高い子弟らは行儀や学問を習うために送られ、ある者はドチリナ・キリシタン、他の者は日本語と漢文、ラテン文法、オルガンの歌を覚え、[19] また日々行列をなして頌歌（サルミ）や連禱（リタニイ）をとなえた[20]（フロイス『日本史』）。

神学校では、司祭志願者、修道志願者たちのために最初の予備的教育を施すのが目的であり、日本語やラテン語の読みかきのほか、算数・キリスト教義・仏教・日本史・作法・唱歌・音楽などを学び、また神学校に附属する実科学校では、絵画・銅版彫刻術・印刷術・オルガンおよび楽器（バイオリン、スピネッタ）の演奏なども教授した。[21]

修練所（casa del nouitiato又はcasa de probaciónともいう）……これは大友宗麟の居城である臼杵の城内に設けられ、優雅な聖堂のほか、司祭の部屋、領主を迎接するための部屋などをもつ立派な建物であった。この修練所の中に同宿、下男のほか、約二十名のイエズス会員が居住していた。ここでは在俗聖識者にえらばれる者（神学校の教育をおえた者か）について、十分な試練を行なったのち、徳操や苦行について教育し、修練させ、そのおわりに、祈とうの方法、ミサの読み方、秘蹟の授け方およびその他の儀式に必要なことのすべてを教授した（ヴァリニャーノ筆「日本諸事要録」（一五八三年）の第五章、第十章）。

またこれら以外に、ラテン語やポルトガル語、哲学や神学なども教えた。修練所はまた児童のための初等学校（小学校（小コレジオ）のようなもの）を併設しており、そこではラテン語や日本語の読みかきを教授した（前掲書、第十章）。

学院（colégio）……一五六四年以来、イエズス会の学院（コレジオ）の概念の一つによると、同校は少なくともイエズス会士二十名を擁し、古典諸学科を教えることになっていた。しかし、巡察使ヴァリニャーノの考えでは、学院を布教の中心にすべく、イエズス会士を八名から十名を置き、また小学校（小コレジオ）を設けることであった。

豊後府内には、大友宗麟の子義統の居城があったが、ここに学院が設けられ、子供たちは日本語やラテン語の読みかきのほか、唱歌・宗教・作法などを学び、素質のよい者には下級神学校（セミナリオ）への入学準備が施された。天正十一、二年（一五八三、八四年）には、哲学

(artes) がはじめて講じられた。[22]

一五八一年（天正九年）以来、大小の学院が長崎や大村、島原半島の有馬、天草、平戸、博多、薩摩、府内、都（ミヤコ）、安土、堺、岐阜などに存在した。

一五八五（天正十三年）には、スコラ神学の研究がはじまり、ペドロ・ゴメス師が聖トマス・アクィナスの神学綱要第一部を、アントニオ・プレネスティノ師は秘蹟論を、一五九四年（文禄三年）にはペドロ・モレホン師が神学生三十名のために哲学と神学の綱要を講義した。[23]

わたしはこれまでに安土、京都（四條坊門［蛸薬師（たこやくし）］室町と新町の間の北側姥柳（うばやなぎ）町）、有馬（北有馬村城山戊三三六九番地の約二四〇坪の畑）、府内（大分市顕徳町一丁目、旧桑野製材所の木材置場、いまはレストランが建つ）、加津佐の神学校（加津佐町役場の前を通って北へ延びる一帯の高さ四〇メートルの丘[24]、眼下に海あり）、天主堂、学院の跡と推定される場所を訪ね、しばし感慨にふけったことがあった。

いずれもそれらの場所は「……の跡」と決定する史料に欠けており、あくまで推測の域を出ないのである。位置を推定するさいの根拠になっているのは、口碑や古文書、古地図などであり、ことに後者にときどき見られる神（Deus）を意味する「大うす（で）」「デウス」「ダイウス」「だいうす」「ダイウス堂」といったような文字や書き入れなどが有力な拠り所であった。

わが国にいったんは根付くかにみえたローマ＝カトリック教も、秀吉の代になって、長崎における宣教師の専横ぶりやマニラから他宗派（サンフランシスコ派）などが渡来しイエズス会士を中傷するに及んで、秀吉の宣教師に対する政策にも大きな影響をあたえた。[25]秀吉は天正十五年（一五八七年）ついに「禁教令」を発し、宣教師は国外退去を命じられ、さらにイエズス会の教会領であった長崎を直轄領とした。

国内に散らばるイエズス会の教会（南蛮寺）や学校は、天正十七年（一五八九年）から慶長十九年（一六一四年）にかけて徹底的に破壊されたために、残念ながらこんにちその遺構はおろか痕跡すら認めえないのである。わたしはこれまで手にとって実見したキリシ

タン版（南蛮系活字印刷によるローマ字本、布教用の教義書など）への興味から、イエズス会の教育機関に関心を抱くに至ったのだが、先頃たまたま「ダイウス」の文字がみられる「安土城下史蹟図」（東京大学史科編纂所蔵[26]）を初めて目にし、それに触発されて安土の神学校（セミナリオ）について稿をおこした次第である。

巡察師ヴァリニャーノは、日本の布教区を下（しも）（大友領を除いた九州一円）、豊後（九州の北東）、五幾内（都（ミヤコ））に分け、そこにイエズス会の学校を創ることを計画し、豊後においては実現しなかったが、有馬と安土にはじっさい神学校が設立された。

オルガンチノ・グネッキ・ソルド（宇留岸・伴天連[27]、一六〇九年四月二十二日長崎で病死、享年七十六歳）が、ヴァリニャーノによって五幾内（近畿地方の中心部）に神学校を創るしごとを委せられたのは、有馬の神学校が設立された直後[28]のことであった。そのためオルガンチノは都（ミヤコ）において直ちに建築資材の調達に取りかかったが、神学校を建設するための用地を確保することは、資金不足や仏僧らの反対もあり、容易ではなかった。

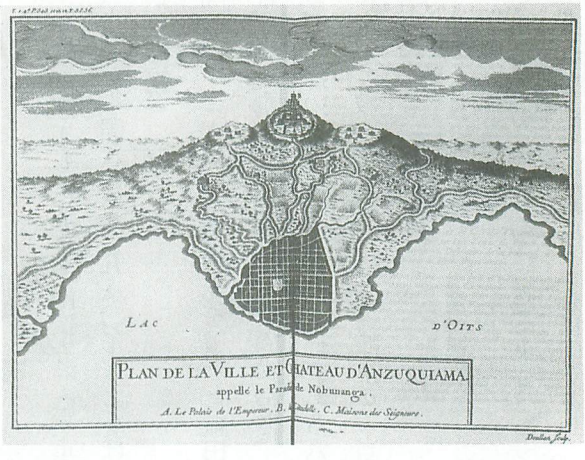
天正六年（一五七八年）春には、三年前に起工した通称「南蛮寺[29]」（天正十六年に破壊される）が、都の四條坊門―姥柳町にできあがっていた。が、天正四年（一五七六年）から同八年（一五八〇年）にかけて伴天連に地所を売ろうとする者はいなく、そのため南蛮寺の近くに学校を造ることは不可能であった。

一方、永禄三年（一五六〇）桶狭間の戦いによって今川義元を破った織田信長は、諸勢力を抑えて、その勢力を拡大させていたが、天正四年（一五七六年）琵琶湖畔―江州蒲土郡安土の地[30]に丹羽長秀に命じ、新たに城（安土城）を築いた。

安土（あづち）は滋賀県蒲生郡にある町であり、近江の豪族佐々木氏の子孫である六角氏がこの地の観音山に城を築いて支配したが、六角義賢が永禄十一年（一五六八）織田信長によって破れたのち、信長は岐阜から当地に進出し、安土山に豪壮な城を築き、そこを住居地としたのである。『一五八一年の日本年報』[31]は、つぎのようにいう。

安土は平地にあり、一方には長さ二十四レグワ（legua（レーグア）は距離の単位、ふつう六六〇〇メートル―引用者）、幅五、六レグワの大きな湖水があって、市（まち）の中にも突入している。また一方には、甚だ広大なる田園があり、耕作を施してある。市は大なる山（安土山―引用者）の麓にあり、

正面の山は，信長の城があった安土山（標高 199 メートル）。左端の家があるあたりが神学校の跡地とみられる。［筆者撮影］



le p. de Charlevoix : *Histoire et Description Generale du Japan*; tome Premier, M. DCC. XXXVI. にみられる安土山と城下の図。［財団法人　東洋文庫蔵］

この山は三つの小なる山に分かれ、樹木が繁茂し、緑におおわれ甚だ立派である。

山は湖水に囲まれ、この地は甚だ美しくまた堅固である。三つの山のもっとも高い所に、信長は壮麗堅固なる城を築いて、その栄華を誇示せんと決心した。山の麓には、平民の居住するために造った市があり、街路は広く、真直にして、その美麗を増し、この所に五、六千の住民がいる。

山のふもとの他の地区は、湖水の入江によって市と隔離されているが、そこに諸国の領主や信長の家臣らの家が造られ、市は毎日大きくなってい

った。それはいかにも信長の意向に添うものであったからである（フロイス『日本史　3』）。

オルガンチノは、信長の居城とその臣下の間で住むことによって、イエズス会の信用と名誉を獲得し、さらに威信を高めるためにも、安土の城下に布教所（教会）を建てるのが得策と判断した。しかし、安土は土地が狭いうえに、平地が不足していた。そこでオルガンチノは信長の謁見を許された折、イエズス会士の住居にふさわしい地所を付与されることを願いでた。信長は与える土地について考慮する、と述べたのち、これ以上に良好な場所はないと思われる地所を司祭にあたえた（フロイス『日本史　3』）。

神学校（セミナリオ）の所在地について。

オルガンチノが信長より土地を与えられたのは、天正八年（一五八〇）閏三月十六日のことであった。信長は宣教師に屋敷をあたえ

んがために、菅屋九右衛門、堀九太郎、長谷川竹ら三奉行の手で、新道の北に溝渠（みぞ）を掘らせ、田を埋めさせ、その地をつくらせた。[32]

この干拓事業については、外国側の資料に、

数日前、信長には、城山と市の間にある湖の小さな入江を埋め立てたいとの気持が生じ、彼自身もそれが何のためであるか知ることなく、多数の者を動員して埋立て作業を命じたが、十五日か二十日間で工事が終り、彼の館の前に一つの広い敷地が出現した（フロイス『日本史　3』）。

とある。

フロイスのこの記事は、ダニエロ・バルトリによって利用され、その著書『イエズス会史』（一六六〇年ローマ刊）の中で、ほぼ同じようなことを記している。

ちょうどそのころ信長は、大勢の人間の労役によって、安土山と町との間にある沼を二十日で埋めさせた。そのとき信長はじぶんの城に住んでいたのだが、その埋立て地はすばらしい平地となった。かれはその土地を神父たちに与えたいと思い、あとから取りこわさせた二軒の家の地所とともに神父らに与えた。[33]

またこれは『信長公記十三巻』（天正八年閏二月十六日のくだり）に見られる、

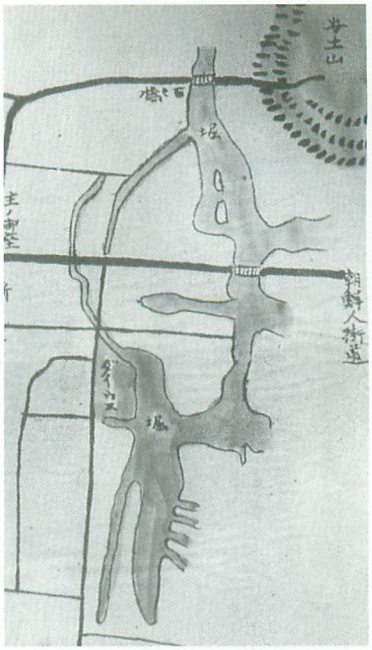
安土御構（安土城―引用者）之南、新道之北に江（川）をほらせられ、田を塡させ、伴天連に御屋敷被下。

といった記述と内容的にもほぼ一致する。

つづいて信長は、翌年秋（天正九年十月七日）に工事中の宣教師の住居の様子を見るために立寄った。

桑實寺より直に新町通御覧し、伴天連所へ立寄、爰に而御普講之様子被仰付。

また同月二十日には、西方の新町から東方の烏打にかけて、南北に道を二本造らせようとした記事がみられる。



安土・神学校の推定位置を示す地図。
（『近江蒲生郡志　巻三』より）

十月廿日より伴天連北南に二通、新町烏打へ取続立させられ候はん由候て云々。

とある。

ところで安土・神学校があった場所であるが、そこは安土町下豊浦の新町に接する沼地のそばの地と考えられている。神学校の遺址にはじめて言及したのは、近江の著名な郷土史家・中川泉三（一八六九～?）であり、大正十一年（一九二二）三月『近江蒲生郡志巻三』（滋賀県蒲生郡役所）において、

その所在は城南新町通に接したもの〻如く、今ニ城濠に連接せる西南方の溝渠（みぞ）と新町とに介在して「ダイウス」、又新町の北に接して「シウノミザ」（主の御座―引用者）、「シキライ」（不詳）の地名を存するので、恐らく天主・主の御座等、外教（キリスト教）関係の称号が偶々その関係地を示しているものと思はれる（三三九頁）。

と記している。また明治八年（一八七五）の地券（官が発給する土地所有に関する証書）改正のとき、その一帯の小字（町村の字をさらに細かく分けた区域）を合称して〝敷来〟と改めたが、「土人（土着の住民）は今に旧知名を伝称す」（『近江蒲生郡志　巻三』）という。

安土旧町割図『近江蒲生郡誌　巻三』（大正11・3）より。

安土・神学校の敷地（約四十坪）は、『信長公記　十三巻』（天正八年閏二月十六日のくだり）に見られる「安土御構（安土城）之南、新道之北」と考えられている。その位置は城から見て、ちょうど南（旧町屋敷地帯との境）にあたり、ダニエロ・バルトリの『イエズス会史』（一六六〇年ローマ刊）の一五〇頁に見られる記述、「安土山と町との間」に該当する。

この下豊浦の新町通りの一角を神学校跡とする主張には、さらにつぎのようなものがある。

現在の安土町下豊浦にある新町通りの一角、すなわち、桑実寺より北上して烏打越町、今日の城南を東西に走る浜道（朝鮮人街道――昔朝鮮使節が通ったことからこのように呼ぶ――引用者）へ抜ける道の一地と見ることができ、現在小字ダイウスと呼ばれる地点と比定される。（中略）

現在ダイウスなる地域は、その土地約四十坪計りの畠地となり、東北南の三方は堀にて囲繞（かこむ）され、堅牢なる石垣をもって築かれている。ただし、東面の中央五、六間のところを欠くが、下方にその土台石の並列するところより見て、以前は他と同様の高さの石垣の在したことを知ることができる。（中略）

前面にある堀の、現在でも豊浦中最も深く、その盛り土の表土の高さは、他

の土地より一段と高いのは、『信長公記』の「江をほらせられ、田を塡めさせ」たことに符合する。石垣もその積み方が安土城址のそれとほぼ類似していることも、この地の住院敷地であった一証である（助野建太郎・小和田哲男『近江の城下町』桜楓社、昭和46・6）。

そしてこの主張の結論は、「以上、内外文献の記載と現地の状態ならびに伝承の地名等よりおして、当ダイウス地がセミナリヨの遺跡であることは明らかに疑を入れないものである」といったものである（前掲書、二〇〇頁）。

こんにち安土町に、信長時代の唯一の石垣塀の遺構と考えられるものが、下豊浦の東康彦邸に残っている。しかし、それが四百数十年前のものと断定するに足る史料はないのである。

安土城の天主閣に通じる通路（入口付近）。［筆者撮影］

安土城の石垣をつくったのは、馬渕衆とか穴太衆[34]と呼ばれた石積みの専門家たちであった。かれらが積みあげた石垣遺構は、こんにち安土山に見ることができる。その技法の特徴は古式穴太積みまたは野面積み（自然石を割って積みあげたもの）と呼ばれるものである。下豊浦の東康彦邸に残る石垣塀は、乱積み（いろいろな石を不規則に積みあげたもの）である。問題の「セミナリオ史跡公園」の石垣であるが、「その積み方が安土城址のそれとほぼ類似している……」（『近江の城下町』）という点が、安土・神学校の敷地であったことの証拠とされた。

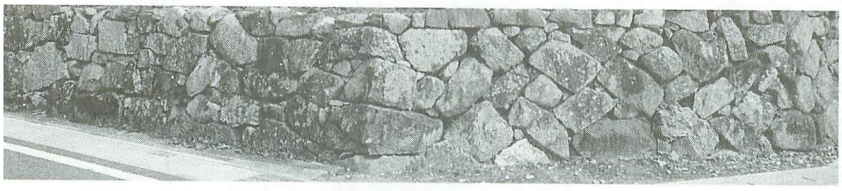
いま安土城址二の丸のもの、惣見寺（安土山）の隅角部石垣などと史跡公園のものとを比較してみると、後者に乱積みの特徴が一部うかがえるものの、それほど類似しているとは思われない。安土城や惣見寺の石垣は大小、長短の石をたくみに積みあげているが、目に与える印象は雑である。一方、史跡公園の石垣は、加工材（石）を整然と積みあげた印象を与えており、きれいな仕事といえる。昭和三十年代後半に撮ったセミナリオ跡の写真をみたことがあるが、それによると、当時、敷地は畑であり、そこに腰下半分ほどの大きさの木製の標柱が立っていた。

そのころ、おそらく堀（沼地）の囲りには、所々に石垣が残っていたと推定される。史跡公園の石垣（上層）は、おそらく安土桃山

時代のものではなく、昭和四十年代後半に史跡公園を造るために新たに積みあげたものであろう。ともあれ、下豊浦の「堀」の近くに、イエズス会の伝道と教育の中心が置かれていたと考えて差しつかえなかろう。

安土町教育委員会から来た、「セミナリオ公園」の石垣についての明確な年代に関する質問の回答によると、石垣の上層は修復されているが、下層部分はその以前からあったものであるという。しかし、残念ながら、町役場に石垣についての資料や文書は残存していないという。

安土城の天主閣に通じる通路入口そばの石垣（乱層野面積み）。［筆者撮影］



安土町下豊浦の東康彦邸に残る石垣塀。（切石乱積み）

「セミナリオ史跡公園」の石垣。（切石乱積み）。

安土の神学校の位置に言及した外国側の資料は、ほとんど皆無にひとしいのである。現在、「セミナリオ史跡公園」とある所は、かつて廃材置場として使われ、また「セミナリオ跡」の簡素な標柱も朽ちはてていたとき、安土町はこれを史跡として保存することを計画し、昭和五十年（一九七五年）下豊浦在住の東康正やカトリック滋賀県連合会などの協力を得てこんにちのような史跡公園に整備されたという（三俣俊二『安土セミナリオ』ひがし印刷）。

『近江蒲生郡志　巻三』の四八一頁には「安土城下セミナリオ所在推定図」が添えられおり、安土町下豊浦の堀のそばに「ダイウス」の文字がみえる。これはこの地が神学校の跡地であるという意である。また今回わたしが偶目する機会があったこの推定図と似た「安土城下史蹟図」（東京大学史料編纂所蔵）にみられる「タイウス」（傍点・・は朱色）とある一帯の地は、ほぼ長方形をなしている。現地を訪れたついでにじぶんの足で測ってみたとこ

ろ、縦六十四歩（メートル）、横三十八歩（メートル）ほどの土地であった。

この「セミナリオ史跡公園」があるところがはたして、約四百二十年前に神学校があった場所なのかどうか、確たる史料によって証明できない以上、何ともいえないのである。しかしながら、近くの堀から神学校の青色の屋根瓦が[35]たくさん発見されたこともあって（下豊浦の故東康正談）、確実と考えられている（三俣俊二『安土セミナリオ』）。

つぎに問題にすべきは神学校の建築様式である。安土・有馬・府内・臼杵の神学校（ゴチック様式の三階建の校舎）を描いた銅版画が、わが国で知られるようになったのは、明治三十年代（一八九〇～一九〇六年）以後[36]のことであるらしい。これら四つの学校を描いた銅版画は、簡単な記事とともにつぎの二書にみられる。

ひとつは一五九六年（慶長元年）にローマにおいて刊行されたマルコ・アントニオ・チアッピ著『教皇グレゴリオ十三世伝』(Marco Antonio Ciappi: *Compendi delle heroiche, et gloriose attioni, et santa vita Papa Greg. XIII. Distinto in tredici capi, in memoria delli IXIII anni, ch'egli visse nel suo felice Pontifiato.* Roma 1596) である。

わたしはこの本の原物をまだ手にとって見ていないが、英国図書館（ブリティッシュ・ライブラリー）は架蔵しており、また国内では京都大学附属図書館がマイクロフィルムを所蔵していることを知った。

もうひとつは一九〇四年（明治三十七年）に同じくローマで刊行されたフランチェスコ・ボンコンパニ＝ルドヴィジ著『ローマを初

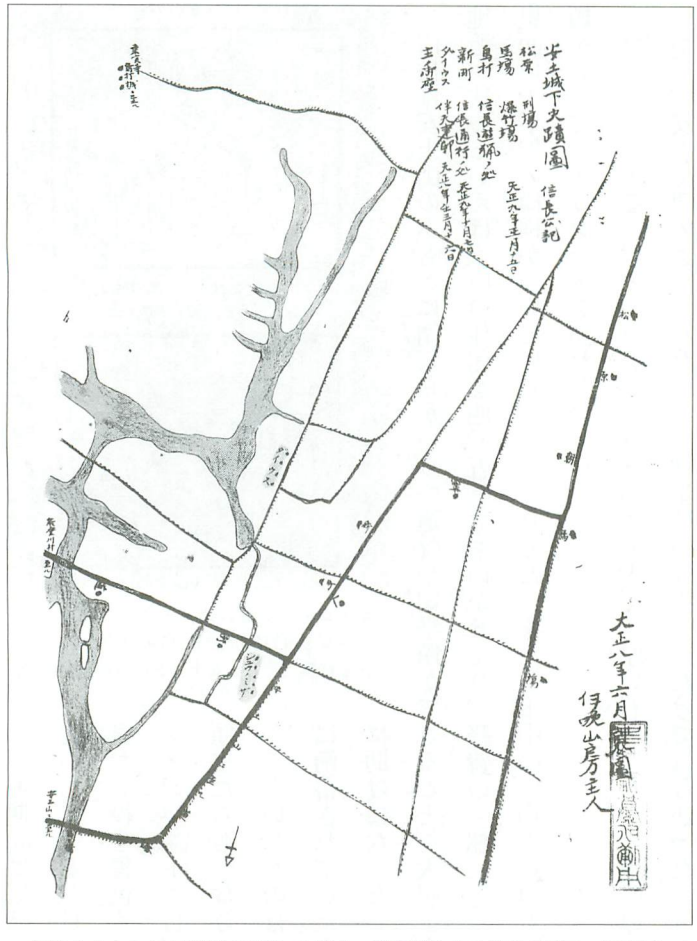
めて訪れた両度の日本使節』(Francesco Boncompagni-Ludovisi : *Le prime due ambasciate dei Giapponesi a Roma* (1585–1615). Con nuovi documenti, in Roma MCM IIII. Per Forzani & Comp Tipografi del Senato) という書である。

わたしは同書を複写写真(フォトスタット)に撮ったものを東京大学史料編纂所でみたが、三十八ページに安土・有馬・府内・臼杵の四ヵ所の学校の銅版画がそえてあった。これは九州三侯の天正遣欧使節（一五八二〜九〇年）と伊達政宗の遣欧使節（一六一三〜二〇年）に関する研究書であるが、こんにち両書は稀覯本なのである。

イエズス会が日本において創った学校の建築様式に関しては、いろいろな説がある。たとえば、だいたいにおいて、それは日本式の木造家屋であったと考えられ、お寺のような姿をし、それに楼閣を加えたものであったと推測される、といった説（浜田耕作「切支丹と芸術」『開国文化』所収）。また日本各地に設けられた教会堂、小さな礼拝堂、宏壮な会堂、住院、学林など、それらに多少ヨーロッパ的な様式が加えられていたとしても、ほぼ仏寺風であったと想像される、といったもの（岡田章雄「南蛮寺の建築」『南蛮帖』所収、地人書館）。

岡本良知（一九〇〇〜七二、歴史学者）の説によると、先にのべたイタリアの二書にみられる学校の銅版画四点はいずれも架空の図[37]であると考えられるという。

さてオルガンチノは土地を確保すると、なる



伊吹山主人こと中川泉三が描いた安土・神学校とその周辺の地図。［東京大学史料編纂所蔵］

マルコ・アントニオ・チアッピ著『教皇グレゴリオ13世伝』(1596年刊)にみられる有馬(上)と安土(下)の神学校の図。

べく短期間に気品のある豪華な学校を建てようと決心した。キリシタン信徒らもできるだけ援助を申しでた。金銭、米、木材などを提供するもの、また労役を提供する者などがいた。ことにキリシタン大名の高山右近(ドン・ジュスト)は、人夫千五百人[38]を出して工事を助けたし、その他諸国の領主たちもかなりの数の人夫を派遣して現場で働かせた。さらに工事にとって幸いしたのは、京都に家数軒と子供たちのための神学校(セミナリオ)をつくるために備蓄されていた多くの木材であり、それがこの工事の遂行にとって大いに助けになった(フロイス『日本史 3』)。

信長は安土山のふもとに司祭(パードレ)らがいう修道院や司祭館(カーザ)ができることを大層よろこび、オルガンチノを優遇し、その建築事業をほめ、地所が狭いといえば家臣の住居を四、五軒立ちのかせたり、経費の一部にと二〇〇クルザード(crusadoは昔のポルトガルの金銀貨、裏面に十字架の模様がついていた)贈ったりした。また工事中の建物をいつも眼下に見ていたので、十五日か二十日ごとに果物や菓子類をもってオルガンチノを訪れた。

フロイスによると、オルガンチノはきわめて太く、厚い石垣をもって地所の三方を囲んだといい、それは建物に美観をそえたという。しかし、安土に建てようとしたのは、神学校(セミナリオ)の建物一つだけではなかったようだ。

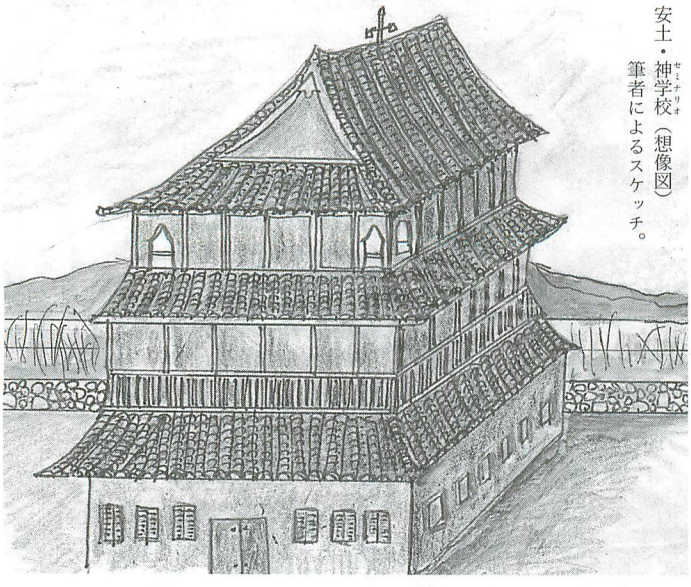
当然、教会堂や住院なども建てることを計画されていた。ダエエロ・バルトリの『イエズス会史』(一六六〇年ローマ刊)に、「すでにオルガンチノは心の中で安土(山)に教会、学院、神学校を建てることを構想していた。そのころ安土山には日本帝国の城があった[39]」とある。

安土の神学校は、和洋折衷の木造三階建であったと推測される。信長は城の瓦とおなじ青色の瓦で屋根をふくことを許したが、瓦には金箔を用いなかった。ひじょうに均整のとれた建物[40]の側面は、石灰で塗られていた。各階の特徴を要約すると、つぎのようになる。

一階……良質の材木を用いて造った座敷（ザシキ）があり、そこに外部の者を泊めることができた。座敷には茶の湯の場所があった（フロイス）。ほかに寝室が二十あった（ヴァリニャーノ）。

二階……日本風に三方に廊下をめぐらした部屋二十室（con veinte cámaras con sus corredores alderredor, al modo que se acostumbra en Japón）[41]があった（ヴァリニャーノ）。それらの部屋は襖（ふすま）によって仕切られていて、すぐに一つの広間に変えることができた（フロイス）。また神父の居室があった。

三階……大広間があって、神学校（教場）として用いられた（フロイス）。その他、生徒の部屋があった。[42]



安土・神学校（セミナリオ）（想像図）
筆者によるスケッチ。

神学校の建物は適度に長く、町のすべての家屋の中でそびえ立っていたから、毎日のように様々な武将たちが見物にきた。

以上述べたものから、どのような建物がイメージされようか。ここで参考になるのは、さまざまの南蛮屏風に描かれている南蛮寺（教会堂）の姿である。[43]そこに描写されているものは必ずしもじっさいの建物を表わしているとはいえないが、教会堂の建築様式の多くは、日本風の寺院をほうふつさせるものである。中には和洋折衷の様式のものも見かける。いずれも屋根のうえに十字架がのっている。

日本におけるカトリック教建築に関する貴重な一資料（アレッサンドロ・ヴァリニャーノが執筆した「日本にわが教館および（教）会堂を建つるに保持せらるべき様式」[44]［*Do modo que se ha deter en fabricar nosas cassas e igrejas em Japão*］（「日本の風俗と気質（カタンギ）に関する注意と警戒」［*Advertimentos e avisos acerca dos costumes e catangues de Jappão*］所収）を得て、その内容を発表したのは岡本良知であった。かれは自著『桃山時代のキリスト文化』東洋堂、昭和23・1）の

「桃山時代のキリスト教建築」において、イエズス会の建物のすべては、日本人の立ち振舞に適するように、すなわち和風の建築でなくてはならず、その設計は日本人の工匠にまかせるべきと、説明している。

もっとも重要なのは、天主堂（教会堂）であり、それはヨーロッパ風の造りとし、日本の寺院の様式を採ってはならないとした。礼拝堂の両側の身廊の下は畳をしきつめ、日本人の男女が坐して礼拝できるようにし、十字架を正面にみる祭壇の前だけを板敷きとするよう規定した（同書、六六頁）。

神学校の教師と授業内容。

安土の神学校は、一五八〇年（天正八年）に設立され、早くも翌々年の一五八二年に、明智光秀の軍勢が安土城と町を襲ったとき、無残にも破壊されてしまった。わずか二年ほどの命であった。安土の神学校が潰滅する直前の教師は、つぎの七名[45]であるが、氏名・職階・担当科目などを記そう。

司　祭……オルガンチノ・グネッキ・ソルド（Organtino Gnecchi Soldo）。生年月日不詳。一六〇九年四月二十二日（慶長十四年三月十八日）長崎で没す。安土・神学校の初代の院長。アルプス地方トレントの南部―カストの出身。一五五六年（弘治二年）フェララでイエズス会に入会、一五六〇年秋からローマ学院で哲学と神学をまなんだ。日本を第二の故郷とみなした。多年にわたって都の布教地区の上長をつとめた。

司　祭……ジョヴァンニ・フランシスコ・ステファノーニ（Giovanni Francesco Stephanoni）。一五四〇年か四二年にローマで生まれ、一六一二年二月二十六日（慶長十七年一月二十五日）長崎で没す。告解を聴くにじゅうぶんな日本語能力をもつ。ラテン語を担当？

助修士（イルマウン）……シメアン・デ・アルメイダ（Simeão de Almeida）。生年月日不詳。一五八四年三月（天正十二年二月）高槻において死去。ポルトガル人。ラテン語を教えた。

ディオゴ・ペレイラ（Diogo Pereira）。一五五〇か五一年にインドのコチンで生まれ、のちマカオで死去。学校の聖器係、看護係、門番などを勤めた。日本語をよく話したが、授業には関わらなかった。

ジェロニモ・ヴァス（Jeronimo Vaz）。生年月日不詳。一五八八年十二月（天正十六年十月）長崎において死去。一五七九年日本においてイエズス会に入会。安土の神学校における仕事については不明。

助修士（イルマウン）……ヴィセンテとういん（Vicente Toin）。医師・パウロ養方軒の子として天文九年（一五四〇）若狭に生まれ、慶長十五年（一六一〇）京都において死去。日本文字と漢字について豊富な知識をもち、福音書・聖人伝などを翻訳した。安土の神学校では日本文学や仏教（各宗派の本旨）[46]をおしえ、また隣接する諸村において説教などをした。日本で入会した稀有の才能をもつ人々のひとりであり、ヴァリニャーノから高く評価されていた。

司　祭……ジュゼッペ・フォルナレッテ（Giuseppe Fornaletti）。一五四五年か四六年にヴェニスに生まれた。没年については不詳。北イタリアの古い貴族の出身とされ、一五七一年（元亀二年）イエズス会に入る。一五七六年極東に派遣される。あまり神学校とは関わらず布教事業に専念した。しかし、アルメイダが病気になったとき、ラテン語を担当した。

神学校の建物が完成したとき、有馬の神学校とおなじ規則と手続[47]によって生徒の収容を開始したのであるが、院長オルガンチノが直面したのは、学校にふさわしい生徒をどのように集めるかということであった。親たちは神学校は何をするところか、その目的を知らなかったので子供をそこへ遣ることを嫌ったし、少年たちも自由を奪われること、仏僧のあいだで習慣となっている剃髪を恐れた。

そこでオルガンチノは高槻へ出かけ、高山右近の家臣の子弟のなかから八名ほどの少年を選び、祭にことよせて安土に招き、司祭らが教会に留まるよう諄々と説いた結果、かれらは司祭のことばに従い、自らの手で髪を切った。その後、オルガンチノは領主の右近に手紙を出し、親たちがこの件を甘受してくれるよう働きかけた。やがて領主右近の術策が効を奏し、親も納得した（フロイス『日本史　3』）。

生徒数は一定せず、多少の増減があり、たとえば『一五八一年の日本年報』は「パードレ・オルガンチノが、この目的のために集めた少年武士二十五、六名が今ここに居り、……」[48]といい、まだダニエロ・バルトリの『イエズス会史』（一六六〇年ローマ刊）は、「そして当地にはとくに二十六名の高貴なる若者らがいるが、かれらを集めたのはオルガンチノ神父であった」と記している[49]。この一条は

フロイスの『日本史』を参考にして書いたものであろう。

のちに入校した者を含めて入学者の氏名が判明しているものを記すと、つぎのようになる。

［一五八一年（天正九年）の入学者］

三箇（さんか）アントニオ……元亀元年（一五七〇）ごろ河内国三箇に生まれ、九歳のとき教会に送られ[51]、のち伝道士になるが、一六二二年九月十日（元和八年八月五日）長崎の西坂で火あぶりの刑にあう。

（アントニイ・キウニともいう[50]）

伊智地マンショ……元亀三年（一五七二）河内国に生まれる。高山右近の義兄弟・伊智地文太夫の息子。一五九二年（文禄元年）天草にて死去。

三木パウロ……永禄十年（一五六七）ごろ、徳島の士族三木半太夫の子として生まれ、一五八六年（天正十四年）イエズス会に入会。一五九七年二月五日（慶長元年十二月十九日）長崎の西坂ではりつけになる。

伊智地シモン……永禄十年（一五六七年）河内国に生まれる。前述伊智地マンショの兄弟。一五八七年（天正十五年）有馬に移る。

伊東祐勝ジェロニモ……元亀元年（一五七〇）日向の領主伊東義益の次男に生まれる。一五九三年（文禄二年）に死去。

マティアス・ショ……生没年不詳。イエズス会に入るが、のち脱会。

近江のジュリオ（又はジョアン）……生没年不詳。一五八六年（天正十四年）イエズス会に入るが、一五九二年（文禄元年）脱会ののち背教。

［一五八二年（天正十年）の入学者］

富田メルショール……生没年不詳。一五八二年（天正十年）イエズス会に入る。

紀の国鳥飼トマス……生没年不詳。一五八二年（天正十年）イエズス会に入る。

［入学年度がはっきりしない者］

福永ニコラオ（ニコライ・キアン福永ともいう[52]）……元亀元年（一五七〇）ごろ、近江国永原（現・滋賀県野洲町）で生まれたと推定される。入学年度不詳。一五八八年（天正十六年）イエズス会に入る。一六二三年七月三十一日（寛永十年六月二十二日）長崎で穴吊り刑により殉教。

清水（きよみず）ジョアン（ヤマ）……永禄十年（一五六七）ごろ津の国に生まれ、一五八一年ごろ安土の神学校に入学。一六一四年（慶長十九）マカオに追放されるが六年後秘かに帰国。一六二三年（寛永十年）穴吊りの刑により江戸で殉教。

五幾内のジョルジュ……一五八一年ごろ、安土の神学校に入学。一五八六年（天正十四年）イエズス会に入会。[53]

かくして神学校の授業は、八名の少年に他の少年たち（年齢は九歳から十八歳位まで）も加わって始まるのだが、天正十年（一五八二年）六月、本能寺の変のあと、安土の町が明智軍に襲われる懸念があるため、司祭と生徒たちが一時琵琶湖中の小島（沖島）に避難したときの生徒数は二十八、九名、[54]神父や修道士らを含めると、計三十四、五名の者が神学校にいたと推定されている。

安土の神学校は、有馬の場合と同じように同一の注意・規則および時間割をあたえられてスタートしたのであるが、神学校としての信望を高めるために、[55]しばらくの間入学できるのは侍の子弟だけであった。生徒らは概してやさしく扱われたが、ときにきびしく罰せられることもあった。

巡察使ヴァリニャーノが作製した「神学校内規」[56]によると、生徒はローマ字、ラテン文字、日本文字の読み書き、日本史、仏教などを習ったのち、古典ラテン語の文法（構文論）を教わる。ラテン語を十分修めたら他の学課、とくに道徳を学ぶ。アリストテレス、その他の非キリスト教的な作品を読まないように配慮した。その他、算術・唱歌・作法などのほか、一部の生徒には、楽器（ヴァイオリン、スピネッタ、オルガン）などの演奏や西洋画の描き方、銅版の彫刻法なども教えた。

学問の進んだ生徒は、日本語の教科書によって神学や哲学を学び、また弁論や説教の練習などをした。『続々群書類従　第十二』の「契利斯督記」[57]の中に、「学文之事」としてヨーロッパの学術（修辞学、哲学、論理学、数学、法律学、神学など）のおおよその内容について記されている。これらの学科はすべて神学校の生徒に課されたわけではないが、哲学や神学についていえば、その綱要（主要なところ）を教えたようだ。

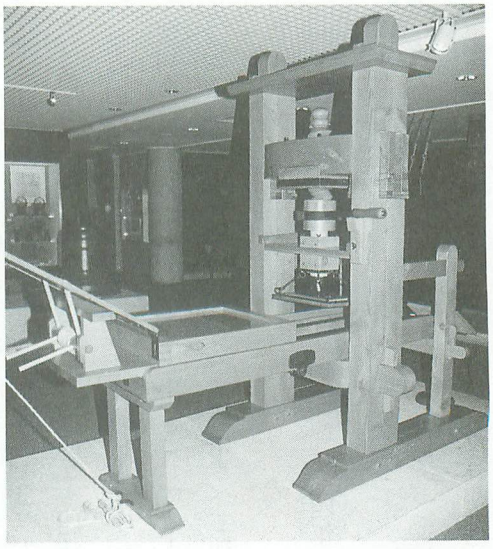
哲学とは、「世界ニ在程ノ物性徳ヲ、四年ノ間ニ知学ニテ候」といったもので、神学とは「デウスノ万事ニ叶ヒ給フ所ヲ学文仕ル事」であった。

諸学科の中でもいちばん重要な科目であったのはラテン語である。が、安土の神学校ではどのようなテキストを使って、どのようにそれを教えたものか明らかでない。文体が逆であり、きわめて奇異なこの言語は、「充分な余暇と必要な施設があって、少年時代から

学習を始める者でなければ達成することは不可能[58]」なものであった。日本布教長フランシスコ・カプラルがまだ日本にいたころ、ヨーロッパ人が互いに交わす会話の内容を日本人にさとられないようにするためにポルトガル語を教えなかったし、また日本人を司祭にさせないためにラテン語を教えなかった[59]。

初期において日本人はポルトガル語を学舎において学んだことはなく、通訳として勤めるうえで個人的に教授をうけたにすぎない。のちにヴァリニャーノによって創設された神学校においても、ポルトガル語は正規の科目として教えることはなかった[60]。

ともかく神学生の頭をさんざん悩ませたラテン語を、しっかりと習いおさめた日本人が後年少数ながら誕生した。たとえば、



澳門博物館（Museo de Macau）にある印刷機の模型。［筆者撮影］

ディエゴ結城
ペドロ・カスイ
ミゲル・メノエス
マルチノ原
セバスチャン木村
ロマン西
コンスタンチノ・ドウラード[61]
ミゲル・ゴトー（日本名・後藤了順）

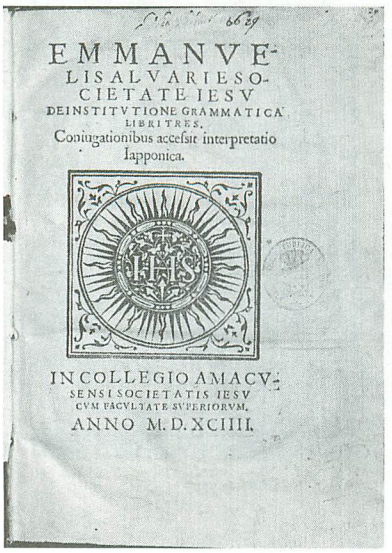
などのイエズス会士である。

日本における正式なラテン語教育は、イエズス会の教育機関においてはじまったのであるが、当初じゅうぶんな成果をあげなかった。日本語とラテン語に通暁した宣教師がいなかったし、また何よりも刊本による教科書が不足しており、生徒は中国（マカオ）で印刷し運んでもらったラテン語の本とか[62]、神父が所持する本を借りて、謄写せざるを得なかったからである。けれどヴァリニャーノが再来日した一五九五年（文禄四年）になると、マカオから舶載した印刷機（prensa tipográfica）[63]によって教科書が刷られるようになり、これによってラテン語の学習はすこし楽になったばかりか、学習も著しく進歩した。

つぎに掲げるものは、天草や長崎などで刊行された代表的な語学書や辞書の類である。これらのキリシタン版は、後年生徒がラテン語を学んだり、あるいは宣教師が日本語を学習するさいに、テキストまたは参考書として編述刊行[64]されたものである。

マノエル・アルヴァレス著『ラテン語文典』（Emmanvelis Alvarie Societate Iesv *De Institutione Grammatica Libri tres. Coniugationibus accessit interpretatio* Iapponica in Collegio Amacvsensi Societatis Iesv cvm Facvltate Svperiorvm. Anno M. D. XCIIII.

このラテン語は、〝イエズス会のマノエル・アルヴァレスの文法入門（三巻）。日本語の解説には、動詞の活用を添付した。長老の許可をえて、一五九四年天草のイエズス会の学院（コレジオ）で刊行〟ほどの意）。

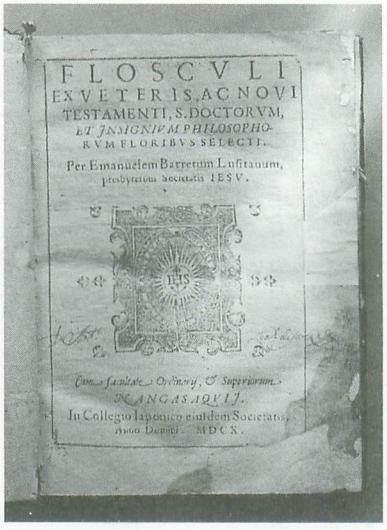

EMMANVE-
LIS ALVARIES O-
CIETATE IESV
DE INSTITVTIONE GRAMMATICA
LIBRI TRES.
Coniugationibus accessit interpretatio
Iapponica.
IHS
IN COLLEGIO AMACV-
SENSI SOCIETATIS IESV
CVM FACVLTATE SVPERIORVM.
ANNO M. D. XCIIII.

天草版　マノエル・アルヴァレス著『ラテン語文典』（1594年刊）。Biblioteca Pública de Evora 蔵。［筆者撮影］

マノエル・アルヴァレス著『ラテン・日本・ポルトガル語規則動詞変化』（Manoel Alvares : *Conjugasão dos verbos regulares em Latim, Japonez e Portuguez*……一五九四年（文禄三年）天草の学院で刊行）

マノエル・バヘット著『聖教精華』（*FLOSCVLI ex veteris, ac novi Testamenti, S. Doctorvm, et Insignium Philosophorvm Floribvbus Selecti.* Per Emanuelem Barretum Lusitanum, presbyterum Societatis IESV. Cum facultate Ordinarÿ, & Superiorum Nangasaqvii. In Collegio Iaponico

eiusdem Societatis. Anno Domini. MDCX. このラテン語は、〝フロスクリ――旧新約聖書、教会の博士、すぐれた作品から精選した詞華集。イエズス会の司祭ルシタニアのマノエル・バヘット著。長崎の教区司祭ならびに長老の許可をえて、日本の長崎にあるイエズス会の学院で一六一〇年に刊行〟ほどの意）



長崎版　マノエル・バヘット著『聖教精華』（1610年刊）の中扉。Biblioteca Pública de Porto 蔵。［筆者撮影］

同書の表紙（元装）。

天草版『ラテン語文典』（たて23.5㎝、よこ16.5㎝、厚さ2.5㎝、用紙は鳥の子紙、七一頁）は、現在の語学書のなかで最も早く出版されたもので、抄本である。内容は、日葡の説明文例、ラテン語・日本語・葡語の動詞活用、ギリシャ・ラテンの古典からの引用文がみられる。著者のマノエル・アルヴァレス（一五二六～八二）は、葡領マデイラ島の生まれであり、一五四六年（天文十五年）イエズス会に入会した。ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語などに通じ、コインブラ、エヴォラ、リスボンなどで学院長を勤めた。[65]

『ラテン語文典』は、一五七二年（元亀三年）にリスボンで刊行されると直ちに好評を博し、イエズス会の学校はこぞって同書をテキストとして採用した。十七世紀以後、この文法書は各地においてますます版をかさね、総計三百種類以上もの刊行をみた。

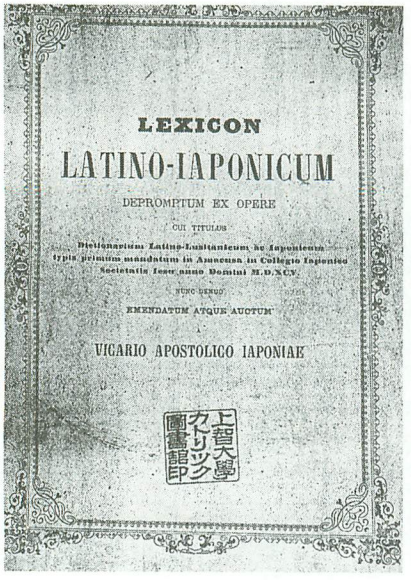
長崎版『聖教精華』（一六一〇年［慶長十五年］刊）は、ポルトガル生まれのイエズス会士マノエル・バヘットが、新旧両約聖書やギリシャ、ローマの著名人の著書から文章を抜いて編述刊行した一種の名家文集である。この中にはアリストテレス、プラトン、セネカ、エウリピデス、ホーマー、シーザー、キケロ、バージル等の詞章がアルファベット順に排列、採録されている。

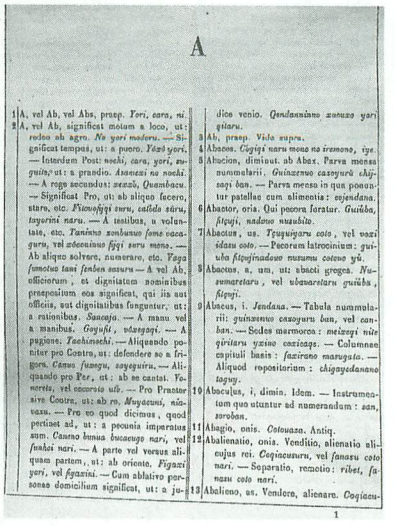
つぎにラテン語学習の参考書として用いられたと考えられるものに、つぎのような天草版『ラテン、ポルトガル、日本語対訳辞典』

（一五九五年［文禄四年］）がある。

*Dictionarium Latino Lusitanicum, AC Japonicum ex Ambrosii Cale*pini volumine depromptum : in quo omissis nominibus proprijstani locorum, quàm hominum, ac quibsdam alÿs minùs usitatis, omnes vocaburū significationes, elegantiorēq; dicendi modi apponuntur : in vsum, & gratiam Iaponicae inuentutis, quae Latino idiomati operam nauat, nec non Europeorū, qui Iaponicū fermonem addiscunt. in Amacvsa in Collegio Iaponico Societatis Iesv cum facultate Superiorum Anno M. D. XCV.

（このラテン語は、〝アンブロジオ・カレピーノの著書から編んだ『ラテン・ポルトガル・日本語辞典』――地名・人名といった固有名詞やあまり用いられないものは省略した。すべての語彙の意味、上品なもの、語法などを添えたもの。同書は、ラテン語の慣用語法を熱心にまなぶ日本青年ばかりか、日本語をさらに学ぼうとするヨーロッパ人からも利用され、かれらに恩恵を与えるであろう。――一五九五年、長老の許可をえて、日本の天草にあるイエズス会の学院において刊行〟ほどの意）





A

1 A, vel Ab, vel Abs, præp. *Tori, cara, ni.*
2 A, vel Ab, significat motum a loco, ut: redeo ab agro. *No yori modoru.* — Significat tempus, ut: a puero. *Tôzô yori.* — Interdum Post: *nochi, cara, yori, zuguitte* ut: a prandio. *Asanesi no nochi.* — A rego secundus: *xeccuô, Quambacu.* — Significat Pro, ut: ab aliquo facere, stare, etc. *Fiomôyôgi suru, cattelo sûru, tayorini naru.* — A testibus, a voluntate, etc. *Tanômo xonbunno fone vocagaru,* vel *adoccinno fôgi seru mono.* — Ab aliquo solvere, numerare, etc. *Yaga sumotsu tani fenben ssuru* — A vel Ab, officiorum, et dignitatum nominibus præponitur eos significat, qui iis aut officiis, aut dignitatibus funguntur; ut: a rationibus. *Suuaiya.* — A manu vel a manibus. *Goyufi, vôzôyaji.* — A pagione. *Tachinoschi.* — Aliquando poniter pro Contra, ut: defendere se a frigore. *Canno fumgu, sayeguiru.* — Aliquando pro Per, ut: ab se cantat. *Yenorrete,* vel *ecorrete ufi.* — Pro Præter sive Contra, ut: ab eo. *Muyôcuni, nôtaxa.* — Pro eo quod dicimus, quod pertinet ad, ut: a pecunia imperatus sum. *Canano bunno bucuenge nari,* vel *funbôi nari.* — A parte vel versus aliquam partem, ut: ab oriente. *Figasi yori,* vel *figazini.* — Cum ablativo personae domicilium significat, ut: a judice venio. *Qendannôno xonzuo yori guiaru.*
3 Ab, præp. Vide supra.
4 Abacus. *Cogiqi naru mono no iremono, iye.*
5 Abacion, diminut. ab Abax. Parva mensa nummularii. *Guinzarno casoyurû chôjnaqi ban.* — Parva mensa in qua ponuntur patellae cum alimentis: *sujendana.*
6 Abactor, oris. Qui pecora furatur. *Guiôba, fitqui, nadoro nusubito.*
7 Abactus, us. *Tzuqui garu coto,* vel *voxi idasu coto.* — Pecorum latrocinium: *guiuba fitqui nadoro nusumu cotono yû.*
8 Abactus, a, um, ut: abacti greges. *Nusumaretaru,* vel *ubamaretaru guiôba, fitqui.*
9 Abacus, i. *Jendana.* — Tabula nummularii: *guinzenno casoyuru ban,* vel *canban.* — Sedes marmorea: *meinqi nite qirietaru yxino cazicqa.* — Columnae capituli basis: *fuxirato maruyuta.* — Aliquod repositorium: *chôgayedanano tagui.*
10 Abaculus, i, dimin. Idem. — Instrumentum quo utuntur ad numerandum: *san, zoroban.*
11 Abagio, onis. *Ostouasa.* Antiq.
12 Abalienatio, onis. Venditio, alienatio alicujus rei. *Cogiacuuru,* vel *fanasu coto nari.* — Separatio, remotio: *ribet, fanasu coto nari.*
13 Abalieno, as. Vendere, alienare. *Cogiacu-*

1

プティジャン師の『羅日辞典』(1870年ローマ刊)。［上智大学キリシタン文庫蔵］

この辞典は（読者への「序」二頁、本文九〇一頁、付録四頁、正誤表二頁）は、全部で九〇九頁ある。見出し語は、三二〇〇〇以上もある。一八六九年（明治二年）長崎・大浦天主堂の司祭ベルナール・ターデ・プティジャン（一八二九～八四、長崎で没）は、フィリピンのマニラにおいてこ

の辞典を発見し、それを日本に持ち帰り、ポルトガル語の部分をすべて抜きとり、翌一八七〇年ローマにおいて『羅日辞典』(*Lexicon Latino-Japonicum*)として刊行した。

安土の神学校が教育機関として機能したのは、一五八〇(天正八年)の春ごろから一五八二年の夏までの約二ヵ年にすぎず、今のべたような語学書が日の目をみるのは約十数年後のことであるから、じっさい刊本として利用できなかった。

じっさい印刷に付すまで原稿の整理などに手間どったとしても、一五八四年(天正十一年)ごろ、すでにマカオでは日本人むけのラテン語の文法書や辞典を編むしごとをおえていたようである。「われらはすでに文法書及びカレピーノ Calepino すなわち辞典を編纂し、またニソリョ Nisolio すなわち大辞典 Tesauro に着手した」(マカオのロレンソ・メシャ神父がコインブラの学院長ミゲル・デ・ソウザに宛てて送った書簡=一五八四・一・六付)という。[66]

安土の神学校では、どのようなラテン語教育が行なわれていたものか、それを明らかにする史料はないようだ。その教授法や使用したテキストなどは、他の神学校で用いたものと大同小異であったと考えられる。ともかく神学校の生徒にとってラテン語は、けっして楽しい学習ではなかった。かれらは強制されるラテン語の学習によろこびを見い出せず、嫌っていた。それには理由がある。辞引は語学の学習に不可欠であり、これがないと学びようがないからである。

有家(ありえ)(島原半島南東部、島原湾にのぞむ町)の神学校の場合、はじめ生徒たちはラテン語の学習をきらっていたが、マノエル・アルヴァレスの『ラテン語文典』とカレピーノの『ラテン、ポルトガル、日本語対訳辞典』が出版されるや、生徒たちは「ラテン語の勉強に対して新しい興味を抱いた」[67]ということである。

一五九六年(慶長元年)当時、有家の神学校には九十三名の生徒がおり、ラテン語を学習するクラスは三つ、ラテン語の学習をおえ、日本語を学習するクラスは一つあった。また平家物語など日本文学とローマ字をまなぶクラスが一つあったという。もっとも勉強が進んでいた生徒は三十二名おり、かれらはトレント公会議の教理の本を学んでいた。[68]

一六〇一年(慶長六年)ごろ、長崎の神学校には百名以上の生徒がいた。ラテン語を学習するクラスは三つ、漢字とローマ字をまなぶクラスが一つ、またラテン語の学習を修了した者は、日本語(とくに手紙の書き方)の勉強をつづけ、日本の宗派についての講義を

うけていた。[69]

安土にかぎらずどこの神学校でも生徒はラテン語の学習に心身をすりへらしたようであり、ときに夜中に起きると、ローソクの薄暗い明りのもとでラテン語の勉強をつづけたようだ。

ラテン語や文学についで重要視されたのは、音楽であった。グレゴリオ聖歌、ポリフォニーといった声学の勉強はいちばん大切と考えられ、また一部の生徒は、クラヴォ、ヴィオラ、フルート、オルガンなどの楽器の演奏を練習させられた。一日、信長は安土の神学校を不意に訪れた折、最上層の部屋で生徒にクラヴォとヴィオラを弾奏させ[70]、その美しい音色を聴いて大いに喜んだ。

有家の神学校では、生徒はまたラテン語や日本語で、貞潔の徳、世俗的なことの虚しさ、修道生活の誉れなどについて説教したり、キリストの受難や生、死、復活をテーマとする聖史劇などを演じたし、一部の生徒は油絵の具や水彩絵の具、墨によって〝聖像〟を画く練習をしたり、ヨーロッパから送られてくる図案[71]を模倣して鋼版を彫ったりした。

生徒の服装・食事・起き伏しなどについて。

ヴァリニャーノの規定に従うと、神学校の生徒たちは小ざっぱりした服を着、屋内では〝青い木綿の帷子（ひとえもの）〟を、屋外ではその上に〝青色の衣服と黒いマント（胴服）〟を着ることになっていた。生徒は外とか校内で親族と会うとき、青色の着物か他の色の絹衣を用いた。衣類の洗濯や繕いものは、外来の女性がおこなった。

食事は日本風であり、ふだんの食物は白米が主食であり、汁と菜（食用の葉や根）・魚などを食べ、日曜日とか祝日には、一皿多く、果物か何らかのごちそうが出た。食事中、生徒はラテン語や日本語の読物の朗読を聞いた。

生徒は畳のうえで寝、お互い小机でへだてられていた。一晩中、ローソクがともされていた。冬は二日ごとに入浴し、夏は一週間にいちど川か海へ泳ぎに行くことを許された。

生徒は屋内、屋外で順列を守り、二人ずつ並んで歩いた。外来者は神学校の見物を許されず、生徒は親族が訪ねてきたとき、礼服を着て会った。両親の病気、その他やむをえない理由がある場合は例外として、原則として家族のもとに帰ることを許されなかった。帰るときは、教会に仕えている者二名が生徒に同行した。

祝祭日には授業はなく、昼食後、休息を取ったり散歩したりした。おやつには餅か果物が出された。生徒は毎月、ざんげし、年に四度ほど聖体拝領をおこなった。

神学校の日課（時間表）。

［午前］

四時半……（夏季、冬季をとわず）起床。司祭たちといっしょに朝の祈り。

五時……ミサ聖祭。六時まで残りの時間を座敷ですごす。

六時～七時半……小さい者はラテン語の単語を覚え、その他の生徒は、学課を覚える。

七時半～九時……ラテン語の教師のもとへ行き、宿題をみせる。上級生は下級生を試問したり、かれらが書いた答案を訂正したりする。

九時～十一時……この間に食事をとり、かつ休養をとる。

［午前から午後］

十一時～二時……日本語の学習。日本語の教師が課する作文（和文による書簡）、習字などの修正をうける。

二時～三時……唱歌、楽器の演奏を練習。のこりの時間は休息をとる。

三時～四時……ラテン語の教師のもとへ行く。教師はこのとき、生徒に文章をひとつ書かせたり、文章を朗読してやる。下級生にはラテン語の文章の読み書きをさせる。残りの時間は、自由にすごす。

五時～七時……夕食。のち休息をとる。

七時～八時……ラテン語の復習。下級生は日本文字、ローマ字の学習。その他の学習。

八時～……反省と夕べの祈り、のち就床。

その他。その週に祝日がないとき、水曜日に二時間だけ日本語の読み書きをし、午後一時からは自由時間。ただし、しばらく聖歌の合唱、クラヴォ、ギターなどの練習をおこなう。

土曜日の午前中は、その週に学んだラテン語の復習をおこない、昼食後、日本語の読み書きの練習。放課後の自由時間は、入浴や散髪、告解などに充てる。夕食後、霊的な話や説教を聴き、それについて話しあう。

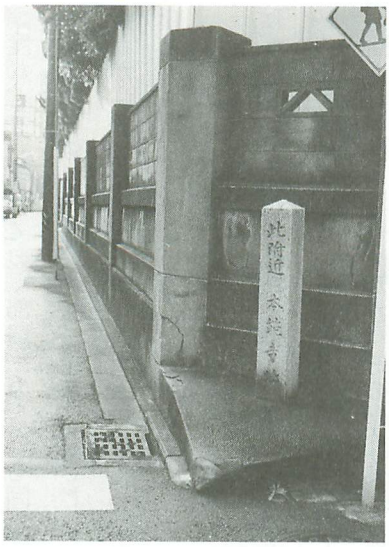
日曜、祝日は、昼食後、別荘へ行って休息したり、天気が悪いときは、終日屋内で休養したり楽器を弾いたりする。

夏季、酷暑のときには、院長の判断で勉学を中止し、休暇をとらせた。[72]

安土・神学校（セミナリオ）の終焉。

イエズス会の安土・神学校は、創建当時から信長の大きな支持をうけて発展するかに思われたが、わずか二年余りで突如、本能寺の変（天文十年［一五八二］六月二日の仏暁に起る）を契機に、形骸化しのち完ぷなきまでに破壊された。安土城主の運命は、また城下町や神学校の運命であったといえる。

信長は天文十年五月二十九日安土を発し、六月一日本能寺（いまの西洞院通と油小路とのあいだ東西一町、六角通と錦小路とのあいだ南北二町の地域）[73]に着いたが、配下の軍勢はわずかに百六十余、長子信忠も京都に入って室町二條の妙覚寺を宿舎としたが、これもわずかの手勢しか率いていなかった。[74]



この標柱の北側は旧本能寺の敷地。［筆者撮影］

信長は事変の二年前――天正八年（一五八〇）二月、本能寺を専用の宿舎とすべく、僧侶を追い出したうえ、[75]造改築をおこない、四方に堀をめぐらし、内側には土居（土手）を築いて木戸を設け、仏殿・客殿・厩舎まで造った。

天文十年六月二日（一五八二・七・一）の明け方、明智光春が率いる兵三千五百は、[76]本能寺の四方を囲むと、鉄砲を打ちかけ、御堂に乱入した。信長や御小姓衆は外がさわがしくなったとき、下々のけんか騒ぎぐらいしか思わなかった。しかし、やがてそれが容易ならぬ事態であると悟ると、信長はみずから弓や薙刀をとって戦ったが、背に矢を、[77]腕に弾創をうけたので殿中奥深く入り、納戸（なんど）（衣服、[78]

調度などをしまっておく部屋）の入口を固く閉ざし、割腹して果てた（『信長公記　巻十五』）。

鬨の声、鉄砲の音、刃を交える音、さけび声などにまじって、殿舎の中からぱっと火の手があがった。信長はその火災の中にあったのだが、光秀は火が収まったとき、信長の遺骸を必死にみつけようとした。しかし、ついに何一つ発見できなかった。「毛髪も残らず塵と灰に帰した」[79]ということである。

京から安土までは、およそ十四里（五六キロ）である。同日の辰の刻（午前十時ごろ）には、早くも凶変の第一報が安土城に届けられた。やがて都から逃れて来る人びとによって、第二、第三の情報が寄せられ、安土の城下は大混乱に陥った。光秀は未の刻（午後二時ごろ）軍勢をひきいて京を発し、安土にむかっていた。が、瀬田（滋賀県大津市南部にある、交通の要地）の橋まで来ると、橋梁が切断されていることを知り、その修理復旧を待たねばならず、居城がある坂本（現・大津市北部、比叡山の東麓）へむかった。[80]

瀬田の城主・山岡景隆は、本能寺の変に接すると、直ちに城に火をかけ、橋を落とし、明智軍の進撃を阻止したのである。このことによって京と安土との交通は断たれ、通信は途絶したため、安土の城下は何の情報も入らなくなり、住民はますます不安に陥り、逸早く城下をあとにする者が続出した。

六月三日、安土の留守役・近江日野の城主・蒲生賢秀は、明智軍に抗することができないと知るや、信長の妻妾らをともなって城から退去した。光秀は瀬田より坂本に入ると、近江や美濃の諸将に降伏をすすめ、四日にはほぼ平定し、五日には修復した瀬田橋を渡り安土にむかった。

一方、明智軍接近の報に、城下は恐慌状態にあった。明智がくると、市街全体は、城も家も何一つ残さず焼かれるであろう、いったうわさが立っていた（フロイス『日本史　3』）。

耳に入ってくるうわさは、どれも恐怖のみを募らせるものばかりなので、司祭たちは同地の少数のキリシタンと協議した結果、神学校の生徒たちを祭具（銀の燭台、振り香炉、聖杯、濃紅色のビロードの祭服など）とともに琵琶湖の沖島に避難させることにした。オルガンチノは、神学校に留守番と修道士のヴィンテと六、七名の日本人を残し、二十八名の者とともに船に乗り、安土を脱出した。

六月六日（七・五）、明智軍は安土に到着した。安土にはもはや光秀に抵抗する者はすべて逃亡していなかった。光秀はただちに信

長の城を占拠し、天主閣に登り、財宝を入れていた蔵と広間を開放すると、二、三日かけて部下の将兵に気前よく金銀を分配した。のちに司祭が権威ある人々から聞いた話では、武将の何人かは、七千クルザード相当の金の棒をもらったという（フロイス『日本史　3』）。

八日（七・七）光秀は安土城を従兄弟の明智左馬助（明智秀満）[81]に託すと、坂本へ帰って行った。光秀が去った安土の城下は、無秩序状態となり、阿鼻叫喚の巷と化した。家々は押し入られ、家財の掠奪や破壊をうけたばかりか、路上では追剝や辻強盗が跳梁し、あちこちで人も殺された。

城のそばにあった肝心な神学校は、新築で、しかも建築がつづけられていたから、明智の兵士らの目にとまり、直ちに押し入られると、掠奪がはじまった。そのころ同地方にあったイエズス会の家財や装飾品の大部分は、神学校内に集められていた。[82]

兵士らが奪い取って行ったものは、――家具・鍋・部屋の戸、窓、畳、襖（ふすま）――などのほか、教会堂を建設するために買集めてあった材木（二八〇〇クルザードに相当）にまで及んだ（フロイス『日本史　3』）。教会のビロードの装飾品、祭壇の銀器、少数の書物は、すでに搬出されていたので掠奪の被害にあわずにすんだ。残ったものは何かといえば、「家の支柱と瓦のみであった」[83]という。つまり建物は、運び出すことができない屋根と柱――、骨組みだけになったということである。

安土の城をあずかっていた明智左馬助は、六月十三日（七・一二）光秀の軍勢が山崎の合戦に破れたことを知ると、翌十四日の未明に天主閣に火を放ち、坂本をさして落ち延びていった。[84]信長の子信雄の軍勢は安土城下に入ると、光秀の残党を追討するために町に放火したために、市街地はほとんど焼失した。

ラウレス師は「安土のセミナリオ」の中で、「当時、街のすべてが焼けてしまったとき、神学校の建物も火災によって破壊されたものかどうか、イエズス会士の書簡からは伺い知ることができない」と述べている。[85]

安土の神学校もこのとき類焼したか放火によって焼け落ちたものであろう。これが神学校の末路であった。

一方、沖島に避難していたオルガンチノの一行は、海賊ら追剝らの掠奪や殺害におびやかされていたが、のち坂本におもむき、ついで京都の南蛮寺[86]に身を寄せたが、そこはひじょうに手狭であったので、天正十一年（一五八三年）高山右近の招きにより[87]城下の高槻に移動した。

高槻では天正十三年（一五八五）良家の子弟が新たに六、七名生徒として入学した。同年、右近は高槻から明石に転封になったので神学校も移らねばならず、大坂において再開した。しかし、大坂に移ったのもつかの間、天正十五年（一五八七年）秀吉は九州征伐の帰途、博多において不徹底ではあったが禁教令を出し、宣教師の国外追放を命じ、長崎（教会領）を直轄領とした。

しかし、宣教師らはじっさい日本国内から退去せず、九州各地に潜伏し、布教活動をつづけた。オルガンチノは二名の日本人とともに小豆島（瀬戸内海第二の島）に身をかくした。ときどき司祭や信徒らは、隠れ家を出ると、五幾内の信者を訪ねたが、教会堂や住院は秀吉の命によって、すでに破壊されていた。[88]

三十名ちかくいた生徒のうち四、五名は、家に帰され、残りの者は帰宅するか、神父に従って九州へ落ちてゆくか、選択を求められた。

生徒のほぼ全員が神父らと行を共する途をえらんだので、そのころ日本で唯一つ残っていた有馬の神学校へむかった。天正十五年（一五八七）安土・神学校は有馬・神学校と合併した。またこの年、京都の南蛮寺は焼き払われた（「亜媽港紀略藁上」）。

慶長十七年（一六一二年）家康が禁教令を出したことにより、有馬の神学校も閉鎖せざるを得なくなり、こんどは長崎へ移った。しかし、慶長十八年、禁教令が全国に公布され、さらにその翌年の同十九年（一六一四年）には、高山右近らキリスト教徒は海外に追放された。この年をもって、日本におけるイエズス会の教育事業は終焉をむかえた。

寛永十六年（一六三九年）、ポルトガル人の来航は禁じられ（「南蛮人渡海一切御禁制之事」）、鎖国体制がほぼ完成した。

*

安土・神学校については、諸書において断片的な記述を目にすることがあっても、まとまった論文なり、著書となると意外に少ないのである。今回、稿をおこすに当って役に立った文献は、欧文（英文）では、ジョン・ラウレス師（故人）が『ザ・ミッショナリ・ブルティン』誌（九月～十月号、第六巻第五号、一九五二年）に発表した小論「安土のセミナリオ」（一四一～一四七頁）と聖母女学院短期大学教授・三俣俊二氏（一九三二～）が執筆した小冊子『安土セミナリヨ』［一～六〇頁］（ひがし印刷、一九九二年刊）および同

書の増補改訂版『信長と安土セミナリオ』[一～一一四頁]（ひがし印刷、一九九九年）であった。

わたしがイエズス会の安土・神学校とそこにおける教育に着目したのは、いま手がけている日本洋学史――日本人の西欧語の受容といった研究に派生している。執筆にあたって、いろいろ文献資料をあさっているうちに、近江の著名な郷土史家・中川泉三がみずから描いた「安土城下史蹟図」を発見できたし、また宣教師たちがヨーロッパに書き送った、数多の貴重な日本通信（『日本年報』）に目をふれる機会にもめぐまれた。けれど、これらの稀書は、語学のできぬわたしには、どれも歯が立たぬ代物であり、宝の持ち腐れであった。

しかしながら、辞引の助けを借りて、怪しいながらも、ところどころ判読できる箇所もあったので、今回本文の補綴（ほてい）として用いることにした。

本稿は、キリスト教の日本伝来にはじまり、ついで日本におけるイエズス会の教育機関にふれ、さらに同会が有馬と並んでわが国において初めて創った安土・神学校の沿革と教育内容、そこで教鞭をとった宣教師や、さらにかれらから薫陶を受けた生徒たちについて、とりとめもなく書きつらねたものである。が、テーマに対する回答が、いささかあやふやになったことは否めない。

史家は研究テーマについて回答を与える場合、史料をよりどころとするが、史料といえどもときに間違っていたりするので、それに全幅の信頼をよせることができないのである。

そこで時には、わかっているデータから未知の答をおしはかろうとするのだが、斯学においては通常、根拠薄弱として取り上げてもらえない。論拠となるのは、あくまで信頼の置ける一等史料なのである。

歴史地理学の観点からいえば、わが国のキリシタン遺蹟と呼ばれているものの大部分は、ことにその位置に関しては疑わしいのではなかろうか。推測にもとづいたものが多く、断定したものは見かけないからである。判断を下すに足る史料に欠けていることも理由の一つと考えられるが、何よりも建築物の残存物――たとえば基礎（土台）、石垣、井戸など――の痕跡すら認めないためである。それほどキリシタン弾圧はすさまじく、天主教に関係するものをすべて徹底的に破壊してしまったようだ。

わたしはとりわけ安土・神学校の位置（敷地）や遺跡に興味をおぼえ今に至っているが、本稿を書きおえてみて、残念ながら、既知

のものになんら新しい事実をつき加えることができないことを知った。しかしながら、ところどころに新しい記述や珍しい図版や写真が見られるはずである。

さいごに文献資料面では、国内外の諸機関にたいへんお世話になった、英国国書館（ブリティッシュ・ライブラリー）、ポルトやエヴォラの公立図書館、マカオ博物館、マカオ文書館、上智大学キリシタン文庫、財団法人東洋文庫、東京大学史料編纂所、早稲田大学中央図書館、専修大学附属図書館、安立町立図書館、安土町教育委員会、神戸市立博物館等に対して、深甚なる謝意を表します。

注

（1）アルーペ神父（井上郁二）訳『フランシスコ・デ・サビエル書翰抄 上巻』（岩波書店、昭和五十二年九月）、三一三頁。

（2）吉田小五郎『サヴィエル』（吉川弘文館、昭和三十四年四月）、七二頁。

（3）ゲオルク・シュールハンメル「日本に於ける聖フランシスコ・ザヴィエル―一五四九―一五五一年―」（キリシタン文化研究所編『キリシタン研究 第一輯』所収、東京堂、昭和十七年六月）、二五四頁。

（4）三俣（みつまた）俊二『安土セミナリオ』（第三版、ひがし印刷、平成十一年五月）、六頁。

（5）片岡弥吉「邦人パードレ養成事業の管見」（『カトリック研究』第十九巻第四号所収）、四八一頁。

（6）同右。

（7）ヴァリニャーノ（松田毅一他訳）『日本巡察記』（平凡社、昭和五十七年九月）、二五四頁。しかし、ジョン・ラウレス師は、ヴァリニャーノの口ノ津上陸を一五七九年七月二十五日としている（Rev. John Laures S. J.: *The Seminary of Azuchi*, The Missionary Bulletin Published by the National Catholic Committee of Japan, vol. VI, No. 5, 1952, p. 141）。

（8）注（4）の七～八頁。

（9）Rev. John Laures S. J.: *The Seminary of Azuchi*, p. 142

（10）注（7）の『日本巡察記』、二五五頁。

（11）新村出『日本吉利支丹文化史』（地人書館、昭和十六年五月）、五九頁。

(12) 助野建太郎『きりしたん文化史點描』（ナツメ社、昭和三十一年二月）、一三頁。

(13) *Lettera Annva di Giappone*, scritta nel 1601, e mandata dal P. Francesco Pasio V. Provinciale Al M. R. P. Claudio Acquavina Generale della Compagnia di Giesù. in Roma, Appresso Luigi Zannetti. MDCIII. Con licenza de Superiori. P. 43, p. 44

(14) 同右。p. 47

(15) Hubert Cieslik. S. J.「セミナリオの教師たち」（『キリシタン研究　第十一輯』所収、吉川弘文館、昭和四十一年三月）、五六頁。

(16) D・シリング撰　岡本良知訳『日本に於ける耶蘇会の学校制度』（東洋堂、昭和十八年三月）、二四六～二四七頁。

(17) 同右、二五五頁。

(18)『キリシタン研究　第十一輯』、五六頁。

(19) ルイス・フロイス　松田毅一、川崎桃太訳『完訳フロイス　日本史10』（中央公論新社、平成十二年十月）、二一〇頁。

(20) 木下杢太郎「天正年間耶蘇会諸教育機関の移動」（『思想』第百號記念特輯所収）、三六三頁。

(21) 注（15）の二五一頁。

(22) 注（15）の二五四～二五六頁。

(23) 注（15）の二五六頁。

(24) 林田第壹號『改訂増補加津佐郷土史　加津佐史談』（非売品、加津佐町、昭和五十六年三月）、七一頁。

(25) 村上直次郎「安土桃山時代の基督教」（日本歴史地理学会編『安土桃山時代史論』所収、日本図書センター、昭和五十一年九月）、三四二頁。

(26) 筆者は、まだこの資料（史蹟図）に言及した記事と出会ったことがない。おそらく紹介するのは、今回が最初かとおもわれる。資料の請求番号は、4447/1である。図は長方形の大きな封筒に入っており、その表に「安土城下町古蹟表在中」（墨書）とあり、左のすみに朱色で「安土城下史蹟図写一枚（大正八年六月）滋賀縣蒲生郡伊吹山房主人製図」といった紙片が張りつけてある。封書の裏には、「滋賀縣蒲生郡役所内　蒲生郡誌編纂掛」（墨書）とある。伊吹山房主人とは、郡誌編纂委員であった中川泉三のことであるが、同人が地図を描き、それを東京大学史料編纂所に寄贈したものである。

(27) この名が出てくるのは『吉利支丹退治物語　二巻』（寛文五年＝一六六五年の翻刻本）においてである。オルガンチノはねずみ色の毛せんの「あびと」（hávito（アービト）＝僧衣）を着て安土に着くと、信長にお礼にまかり出、御やしきをくだされたとある（「近江国安土へ伴天連召寄らるゝ

事」『吉利支丹退治物語　巻上』所収）。

（28）注（9）におなじ。

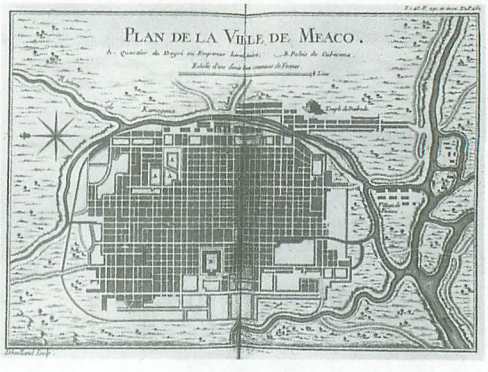
（29）島田貞彦「慶長時代の基督教信者の墓碑」（『考古学雑誌』第八巻第三号［大正6・11］所収）に、「南蛮寺の位置は京都の西部にいづれも三箇所を占めてゐる」とある。

南蛮寺といった呼称は、江戸時代中期以後の追称であって、本名ではない。ふつうそれはキリシタン寺院（イエズス会の教会堂）の意である。しかし、その設立年月はかならずしも明らかでない。元亀元年（一五七〇）とも（柴田常恵「南蛮寺の鐘」『教育学術界』第十八巻第五号所収）、一五七六年（天正四年）八月十五日ともいわれている（バルトリ『イエズス会史』）。京都には計六ヵ所（一条油小路、四条坊門通、四条堀川西下ル、松原又高辻下る、五条堀川、北野および西の京）ほど南蛮寺があったようである（『京都帝国大学文学部考古学研究報告』京都帝国大学、大正十一年～大正十二年）。

当初、南蛮寺はそまつな小屋のようなものを借りて使ったり、あるいは仏堂を買い求めて、それを聖堂として用いていたが、やがて地所を手に入れ、新たに建物を造ることにした。

天正元年（一五七三）、信長は奉行の菅谷九右衛門に命じて、京都四条坊門に四町四方の地をバテレンのルカン（オルガンチノ師）に与え、石垣を築き、永禄寺と名付けた、といった記事が、「京都坊目録下巻之十一」にみられる（古蹟―南蛮寺ノ址）。しかし、時の年号をもって寺号とすることに比叡山の僧らが怒り、朝廷に訴え出たために、信長は南蛮寺を改めさせた（柴謙太郎「京都南蛮寺の位置推定に依る二三史実の解明」『歴史地理』第五十二巻第五号所収、四一二頁）。

狩野元秀筆「南蛮寺扇面図」に見られる聖堂（礼拝堂）だけを拡大した図（この扇面図は，コレクターの手を経ていま「神戸市立博物館」蔵）。



le P. de Charlevoix : *Histoire et Description General du Japon*; tome Premier M. DCC. XXXVI. にみられる京都の地図。［財団法人　東洋文庫蔵］

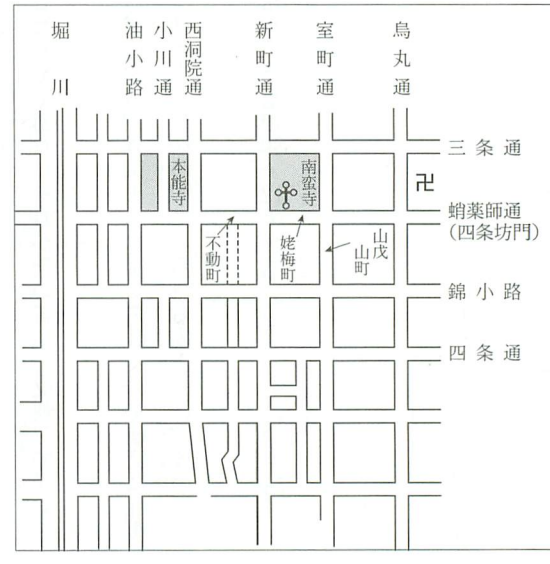
キリシタン信徒の永年の願望であった聖堂（日本式木造三階建）の工事は、オルガンチノ設計により一五七五年（天正三年）末に着工し、一五七八年（天正六年）春に竣工した。工事費は二千五百から三千数百クルサードル要した。一階は礼拝堂、二階は不明、三階は六部屋あった。会堂（通称・南蛮寺）の位置は、四条坊門（蛸薬師）室町と新町のあいだ北側姥柳町である（海老沢有造「南蛮寺日本史料の吟味」『カトリック』第十九巻第二号、昭和十四年三、四月号）。

京都市中京区の烏丸通りと蛸薬師通りが交差する道を入り、五十歩ほど進むと、進行方向の左側に、「パンドール烏丸ビル」と「臙堂印房」の家屋があり、その目の前に「和光株式会社　第二ビル」が建っている。このビルの入口のすみに、南蛮寺の説明板と石碑（「此付近南蛮寺跡」）が立っている。昭和四十五年三月に京都市が新たに設けたものである（写真参照）。

南蛮寺が完成すると、京都の新名所となったのであるが、それはどのような佇まいをしていたかについて明確に教えてくれる内外史料は乏しいのである。しかし、その一つの傍証、この問いにもっとも雄弁に答えてくれるものがある。それは現在、「神戸市立博物館」が収蔵する狩野元秀（宗周の嫡子。天正、文禄のころの絵師）が描いた扇面洛中洛外名所図の中の一枚「南蛮寺扇面図」である。

作者の元秀は天正期には、三十歳前後、この写生図は天正五年（一五七七年）から天正九年（一五八一年）の間に描かれたものと考えられている。天正九年（一五八一年）南蛮寺は接続する民家二戸を購入

蛸薬師通（四条坊門）にある「南蛮寺跡」の標柱と解説板。［筆者撮影］



京都　南蛮寺の推定位置（海老沢有道「京都南蛮寺建立始末」による）。

し、念願の表通りに門を設けることができたが、この点が推定の根拠になっている。

(30) 渡辺世裕『安土桃山時代史』(早稲田大学出版部、大正五年四月)、一四七頁。

(31) 村上直次郎訳註『耶蘇会の日本年報　第一輯』(春秋社、昭和十九年十月)、七六頁。

(32) 『滋賀縣史　第三巻』(滋賀縣、昭和三年三月)、三三九頁。

(33) *Dell' Historia della Compagnia di Giesv IL Giappone* seconda parte Dell' Asia descritta dal P. Daniello Bartoli della medisima Compagnia. in Roma, M. DC. LX. Nella Stamperia d'Ignatio de'Lazzeri. Con Licenza de Svperiori. Libro Primo p. 150

(34) 松本諒士『築城』(理工学社、平成八年一月)、五四～五五頁。

(35) 瓦は黒色であったが、下から見ると青くみえた。瓦を焼くときに雲母の微粉を混ぜたためであり、それが空の青色を反映して青くみえたという(『築城』、五四頁)。

(36) 東京外国語学校校長であった村上直次郎(一八六六～一九六六、明治から昭和期の歴史学者、外国史料による日欧交渉史研究に従事した)は、明治三十二年(一八九九年)ヨーロッパに留学し、ローマ滞在中に『教皇グレゴリオ十三世伝』中にみられる安土の神学校(セミナリオ)の挿絵を発見し、それを写真に撮って帰国した(『近江蒲生郡志　巻三』、四七七頁)。
また岡本良知「天正年間に於ける豊後耶蘇会学校の建築様式」(『別府大学紀要　第六輯』昭和30・12所収)、一五～一六頁を参照。

(37) 右の岡本論文、一九頁。

(38) 注(9)の一四三頁。

(39) *Dell' Historia della Compagnia di Giesv IL Giappon*, Libro Primo p. 148

(40) 東光博英訳「ルイス・フロイスのイエズス会総長宛書簡(一五八二・一〇・三一付、口之津発信)(『十六・七世紀イエズス会日本報告書第Ⅲ期第6巻』所収、株式会社同朋舎出版、平成三年十二月)、五四頁。

(41) Monumenta Nipponica Monographs—Alejandro Valignano S. I. *Sumario de las Cosas de Japon* (1583)　*Adiciones del Sumario*

DELL' HISTORIA
DELLA COMPAGNIA
DI GIESV
IL GIAPPONE
SECONDA PARTE
DELL' ASIA
Descritta
DAL P. DANIELLO BARTOLI
Della medesima Compagnia.
IN ROMA, M. DC. LX.
Nella Stamperia d'Ignatio de'Lazzeri.
CON LICENZA DE' SUPERIORI.

ダニエロ・バルトリ著『日本イエズス会史』(1660年ローマ刊)の中扉。[財団法人　東洋文庫蔵]

de Japon (1592), Editados por José Luis Alvarez-Taladriz tomo 1, Sophia University, Tokyo, 1954, p. 121

(42) 注（20）の四二頁。

(43) 坂本満／グレイス・A・H・フラム／井出洋一郎『日本屏風絵集成　第十五巻　風俗画　南蛮風俗』（講談社、昭和五十四年八月）所収の「南蛮寺景観」（坂本満）を参照。

(44) 岡本良知が「桃山時代のキリスト教建築」を執筆する際に用いた種本は、つぎに掲げる『日本における宣教師のための儀典書』であろう。*//Cerimoniale per I Missionari del Giappone, "Advertimentos e Avisos Acerca dos Costumes e Catangues de Jappão" di Alexandro Valignano S. J.* …Edizione Critica, introduzione e note di Giuseppe Fr. Schütte S. J. Edizioni di《Storia e Letteratura》, Roma, 1946.

同書の第二部（Libro Seconda）の七章―二七〇頁から二八一頁にかけて依拠した資料（スペイン語とイタリア語の対訳）がみられる。

(45) ルイス・フロイスがイエズス会総長に宛てて送った書簡（一五八二・一一・五付、口之津発信）（『耶蘇会の日本年報　第一輯』所収）によると、当時安土にいたのは、オルガンチノ、ジョアン、シメアン、ディオゴ、ヴィンセントら五名であった（二五三～二五四頁）。七名の教師名については、注（15）の Cieslik 論文のほか、アントニオ・フランシスコ・カルディム著『日本殉教精華』（一六四六年＝正保三年刊）（*Mors Felicissima Quatvor Legatorum Lustanorum et Sociorum Quos Iapponiae Imperator Occit in Odium Christiane Religionis Auctore P. Antonio Francisco Cardim è Societate IESV Procuratore ad Urbem Provincia Iapponia.* Romae, Typis Heredum Cortelletti, 1646, Syperiorvm permissv.）を参照した。

(46) 村上直次郎訳註『耶蘇会の日本年報　第二輯』（拓文堂、昭和十九年二月）、五四頁。

(47) 注（31）の五五頁。

(48) 注（31）の八八頁。

(49) *Dell' Historia della Compagnia di Gsiesv IL Giappone*, p. 157

(50) A. F. Cardim, p. 79

(51) Léon Pagés : *Histoire de la Religion Chrétienne au Japon depuis 1598 jusgu' a 1651*, Charles Douniol, Librai-éditeur, Paris, 1868, p. 516

(52) A. F. Cardim, p. 159

(53) この一覧表は、松田、佐々間編訳『日本巡察記』桃源社［一〇五頁］、三俣俊二『信長と安土セミナリオ』［九五～九八頁］およびカルディムの著書を参考にしてまとめたもの。

(54) 注（4）の二一頁。

(55) Rev. John Laures S. J., p. 140

(56) ヴァリニャーノ『日本巡察記』（松田毅一・佐々間正編訳）（桃源社、昭和四十年三月）、七七～七九頁を参照。

(57) 『続々群書類従　第十二』（続群書類従完成会、昭和四十五年二月）、六五六～六五七頁。

(58) 井出勝美「キリシタン時代に於ける日本人のキリスト教受容」（『キリシタン研究　第十一輯』所収）、二一六頁。

(59) 同右。

(60) 注（58）の二一五頁。

(61) 注（20）の二二二頁。

(62) 片岡千鶴子『八良尾のセミナリオ』（キリシタン文化研究会、昭和四十五年六月）、三六頁。

(63) これはイエズス会士ヴァリニャーノがマカオに持たらした活字印刷機である。日本へも運んでキリシタン教義書などを刷った。のちアウグスティノ会士に売却され、マニラに運ばれたが、いまは行方不明中である。現在、「マカオ博物館」（Museo de Macao）に複製品が展示されている。

(64) 注（11）の一三八頁。

(65) 注（11）の一三九頁。

(66) 注（46）の一三七頁。

(67) 結城了悟「有馬のセミナリオ　一五九五年―一六一四年」（『キリシタン研究　第二十一輯』所収）、一八〇頁。

(68) 同右、一九〇頁。

(69) 注（67）の一九一頁。

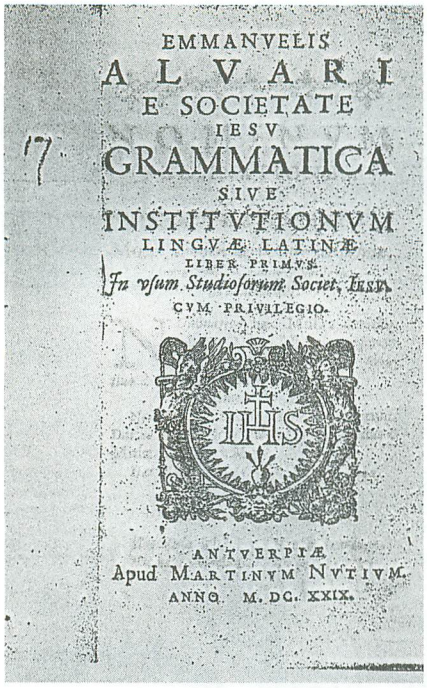
(70) 注（40）の六三頁。

(71) 佐々間正訳「一五九六年イエズス会年報」(『キリシタン研究　第二十輯』所収)、三〇五頁。
(72) 注(56)の七七〜八一頁を参照。
(73) 小酒井儀三「本能寺の変に就いて(下)」(『歴史と地理』第六巻第一号)、三六頁。
(74) 小酒井儀三「本能寺の変に就いて(上)」、三二頁。
(75) 岡田正一編著『織田信長総合事典』(雄山閣出版、平成十一年九月)、四三五頁。
(76) 小泉三申『偉人史叢　臨時発刊　明智光秀　全』(東京　裳華書房発行、明治三十年一月)、一一九頁。
(77) 同右、一二一頁。「信長を本能寺に半弓にて射奉りしは川上某といふ者なり。其の六日目に狂乱して死す」(『明智光秀　全』)とある。
(78) 注(31)の二五六頁。
(79) 同右。
(80) 「信長公記巻十五」(新訂増補『史籍集覧　武家部　戦記編集(十)』(臨川書店、昭和四十二年九月)、二五六頁。
(81) 新日本古典文学大系60『大閤記』(岩波書店、平成七年三月)、六六頁。
(82) 注(31)の二六七頁。
(83) 同右。
(84) 注(81)の七四頁。
(85) Rev. John Laures S. J., p. 146
(86) 注(4)の四四頁。
(87) 注(4)におなじ。
(88) Rev. John Laures S. J., p. 147

正面の石垣の地は，安土・神学校の跡地と推定されている。
石垣の下層は，信長の時代のものと考えられている。［筆者撮影］

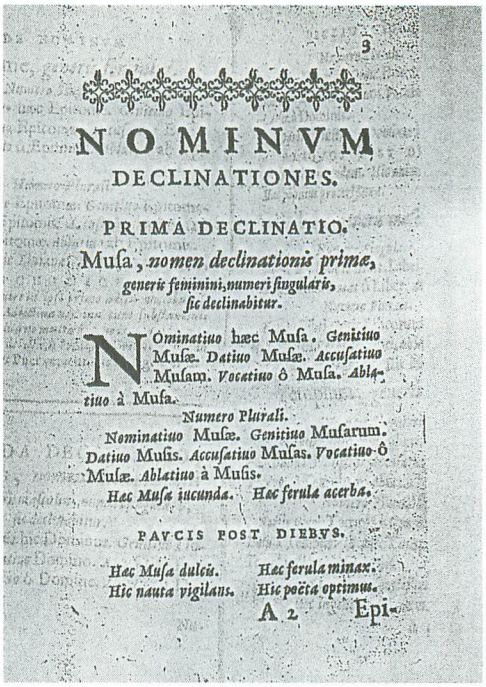
安土町下豊浦の神学校跡地と推定
されている所［筆者撮影］

正面の石垣の地は，安土・神学校跡と
推定されている。



EMMANVELIS
ALVARI
E SOCIETATE
IESV
GRAMMATICA
SIVE
INSTITVTIONVM
LINGVÆ LATINÆ
LIBER PRIMVS.
In vsum Studiosorum Societ. IESV.
CVM PRIVILEGIO.

ANTVERPIÆ
Apud MARTINVM NVTIVM.
ANNO M. DC. XXIX.



3

NOMINVM
DECLINATIONES.

PRIMA DECLINATIO.

Musa, *nomen declinationis primæ, generis feminini, numeri singularis, sic declinabitur.*

Nominatiuo hæc Musa. Genitiuo Musæ. Datiuo Musæ. Accusatiuo Musam. Vocatiuo ô Musa. Ablatiuo à Musa.

Numero Plurali.

Nominatiuo Musæ. Genitiuo Musarum. Datiuo Musis. Accusatiuo Musas. Vocatiuo ô Musæ. Ablatiuo à Musis.

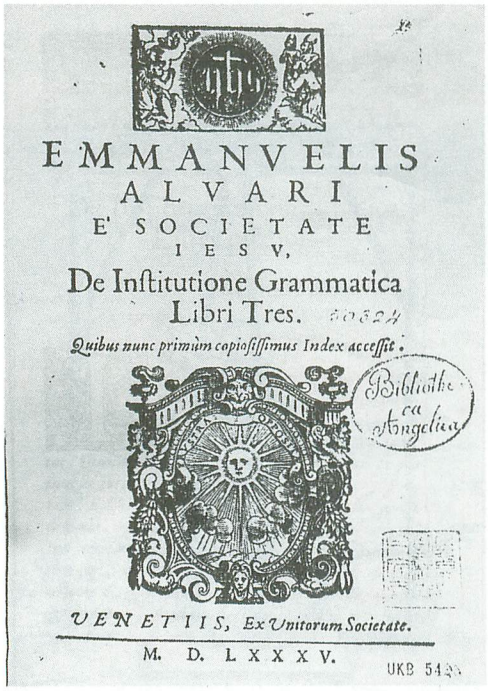
Hæc Musa iucunda. Hæc ferula acerba.

PAVCIS POST DIEBVS.

Hæc Musa dulcis. Hæc ferula minax.
Hic nauta vigilans. Hic poëta optimus.

A 2 Epi-

マノエル・アルヴァレス著『ラテン語文典』
(1629年刊) [British Library 蔵]



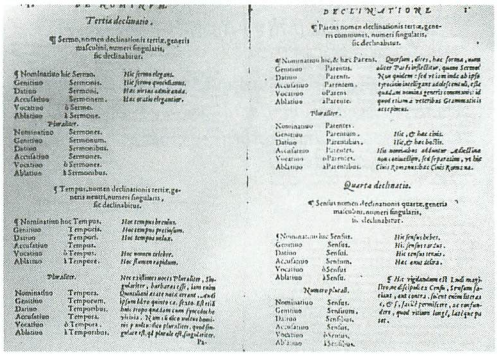
EMMANVELIS
ALVARI
E' SOCIETATE
IESV,
De Institutione Grammatica
Libri Tres.

Quibus nunc primùm copiosissimus Index accessit.

Bibliotheca Angelica

VENETIIS, Ex Vnitorum Societate.
M. D. LXXXV.

UKB 54

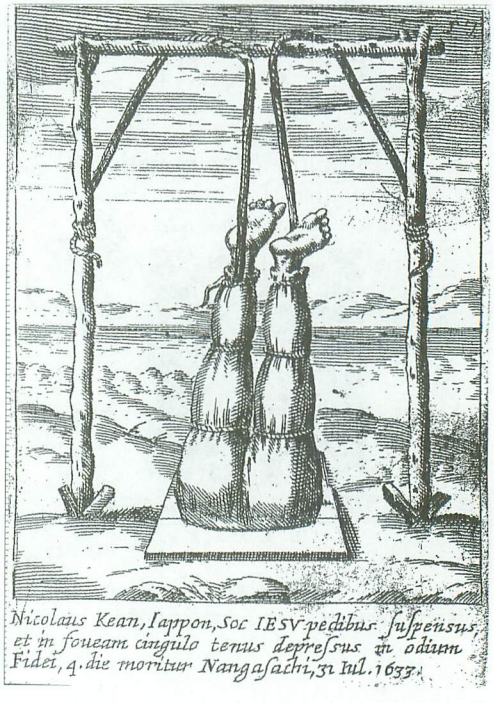


マノエル・アルヴァレス著『ラテン語文典』(1585年刊)[上智大学キリシタン文庫蔵の複写本より]

安土・神学校に学んだ三人の殉教者。

三箇アントニオ（1570？～1622），長崎の西坂において火刑になる図。
Antonio Francisco Cardim : *Mors Felicissima Quatror Legatorum Lustanorum et Sociorum Quos Iaqponiae Imperator……*（1646）より［財団法人　東洋文庫蔵］。

三木パウロ（1567？～97），長崎の西坂において磔刑になる図。



福永ニコライ（ニコライ・キアンともいう，1570？～1633），長崎の西坂において穴吊り刑になる図。

The Remains of the Seminary of Azuchi

Azuchi（安土）is a place in Ōmi（近江），on the north-eastern shore of lake Biwa, where the war lord Nobunaga Oda（織田信長，1534～82）had a magnificent 7-story castle built by Nagahide Niwa（丹羽長秀，1535～85）. The castle and the town was pillaged by the army of Mitsuhide Akechi（明智光秀，1526～82），one of the generals of Nobunaga, after besieging and driving his former lord into death in the temple of Honnō-ji（本能寺）in Kyoto. When the troops of Akechi attacked the temple, Nobunaga withstood them; however, wounded by an arrow, and judging that resistance was useless, he set fire to his temple and committed *harakiri*.

Some 420 years ago, in the castle town of Azuchi, there existed a seminary built by the Jesuits close by a small lake with reeds in the Shimotoyoura（下豊浦）area. The exact location of the seminary still remains unknown; however, the site was nearly ascertained by a local historian, based on the home and foreign materials in the Taishō period（i. e. 1910 s～1920 s）. The seminary of Azuchi is worth mentioning because it is the first erection of a Jesuit seminary, in addition to the one in Arima（有馬）which was opened some time between April and June of the year 1580 in the Shimabara Peninsula, Kyūshū Island.

One who first alluded to the location of the seminary in Azuchi was a famous local historian named Senzo Nakagawa（中川泉三）in Ōmi, who was engaged in compiling "*Ōmigamōgunshi*"（近江蒲生郡誌，i. e. the County History of Gamo in Ōmi; Gamo is a place located in the west of Suzuka mountains in the Shiga prefecture）in the Taisho period.

He took notice of such place names as "Daius" (i. e. *Deus* in Latin) or "Shu no miza" (i. e. *Godś seat*) in the Shinmachi (新町) district of Shimotoyoura, Azuchi, presuming the names had possible relationships with Christianity. So he affixed a map showing these places to the County History of Gamo. The map was supposed to be the only one in existence; however, I happened to see another one drawn by him at the Historiographical Institute of Tokyo University. The newly discovered map was created in the 8 th year of the Taisho (i. e. 1919), with a writing brush and water colours. This discovery spurred me to study the seminary of Azuchi in full.

The purpose of this essay is to describe the vicissitudes of the seminary, which ended in miserable destruction. When the Visitor of the Society of Jesus, Father Alessandro Valignano (1539～1606) arrived in Japan in July, 1579 to inspect and reorganize the missionary work of the Society, he found that conditions were unsatisfactory. Although some 30 years had passed since St. Francis Xavier (1506～52) introduced Christianity into Japan, the shortage of missionary personnel was a serious problem.

Father Francis Cabral, then a *dean in* Japan, was a narrow-minded man, who saw the Japanese as hypocritical, unreliable people. Accordingly, he neither gave them enough religious education nor appointed them as priests. In his opinion, the Japanese were only useful in the capacity of *Dōjuku* (同宿, a lay-helper without vows) who serves as a propagandist.

Valignano felt confident that without the assistance of natives the missionary work would end in failure. He divided the missionary district in Japan into 3 parts : the north-western Kyūshu (District of shimo 下), north-eastern Kyū shu (Bungo 豊後) and Miyako (都, a metropolis) which was called Gokinai (五幾内). He planned to erect three separate seminaries.

Father Organtino (?～1609) was appointed by Valignano to build a seminary in Miyako (i. e. the ancient Capital, Kyoto) soon after the erection of one in

Arima. In Miyako the building of a seminary was not making progress due to difficulties in finding a suitable place for the school, interference with the *bonzes* and lack of funds.

When the new castle built by Nobunaga in Azuchi began to attract many people to visit the town, Father Organtino also intended to pay his visit to the new town with a view to getting permission to build a seminary there. Nobunaga was really flattered by the visit of this Padre who came all the way from Miyako. When Organtino asked for his seminary, Nobunaga not only granted the request but gave him reclaimed land, ordering his men to dig ditches and to bury rice fields.

According to the story told by Father Luis Frois (1532～97) in his *History of Japan*, the land adjustment required some 15 or 20 days for completion. The grant was made on the 9 th of April in the 8 th year of the Tensho (i. e. 22 nd may, 1580). Amazingly the construction of the seminary was complete a month after gaining the land.

Since the materials for building some seminaries had already been assembled in Miyako, these were soon transferred to Azuchi in order to hasten the realization of the building. Many Japanese Christians including feudal lords also assisted the erection. Some lay Christians tendered a straw bag of rice and lumber. Others offered money and labour. The one who offered the most was a war lord named Nagafusa (*alias* Ukon or Giusto Ukondono) Takayama (高山長房［右近］, 1553～1615), who was one of the Christian lords, assigning his people to the task of building the seminary.

Nobunaga was not only satisfied with the seminary but treated Father Organtino with hospitality. Also, he presented him with 200 *crusado* to support him financially. Since his castle stood on a hill commanding lake Biwa and the town, he was able to see the building during the course of construction. Nobunaga called on Organtino every 15 or 20 days, bringing a basket of fruits

or some sweets with him.

Organtino built a 3-story semi-Western style seminary, surrounding the ground with stone walls. *The History of Japan* by Father Frois says rather bombastically that the seminary was a stately building which was comparable with Nobunaga's castle in terms of size and beauty. The *zashiki* (座敷, a drawing room), a tearoom, a guest room and 20 bedrooms took up the ground floor. The upper story was surrounded by corridors on three sides and it contained 20 rooms partitioned with *fusuma* (襖, a sliding-door).

This means that this floor could be transformed into a large hall at any moment when the sliding-doors were removed. Also, Father's private rooms were on this floor. The second floor (i.e. the third floor) was used for the classroom. It was also a large hall with Father's private rooms.

The next problem that confronted Organtino was how to gather the most suitable pupils for the school. So he repaired to Takatsuki (高槻, a castle town in Settsu. It belonged to the Takayamas in the 16 th century) and picked up 8 sons of respectable samurais. For some time only sons of respectable samurais were admitted to the seminary with a view to enhance the prestige of the school. Later on, the pupils increased in number; finally they reached a total of 25 pupils.

The teachers and employees were comprised of 3 Fathers, 2 irmãos and some laymen. Namely they were : Father Organtino Gnecchi Sold (?～1609), Father Giovanni Francesco Stephaneni (1540～1612), Father Giuseppe Fornaletti (1545～?), Irmãon Simeão de Almeida (?～1584), irmãon Vicente Toin (1540～1610), layman Diogo Pereiza and layman Jeroimo Vaz (?～1588).

The complete list of pupils remains unknown, however, known pupils include : Sanka Antonio (1570?～1622) who was burned alive in Nagasaki, Ijichi Mantio (1572～92) who died in Amakusa, Miki Paulo (1567?～97), who was crucified

in Nagasaki, Ijichi Simon (1567～?), Ito Jeronimo (1570～93), Matis Sho (?), Julio of Ōmi (?), Tomita Mershor (?), Torikai Tomas (?), Fukunaga Nicolai (1570?～1633), who died a martyr in Nagasaki, Kiyomizu Joan (1567?～1633), who died a martyr in Edo [i. e. Tokyo], Giorge (?).

The seminary opened with the rules, regulations and the daily horarium prescribed for the one in Arima by Visitor Valignano. The pupils were taught reading and writing in Latin and Japanese. And having acquired a good know ledge of Latin, they were supposed to study morality, philosophy and theology. They were not allowed to read such unchristian works as Aristotle's. Some pupils also learned singing, playing musical instruments, drawings, and copper plate engraving.

Among the subjects the most important one was Latin which greatly troubled the pupils. It was almost impossible to be acquainted with Latin unless they started learning it as a child. Due to the lack of printed textbooks or Latin dictionaries, the pupils were obliged to copy books while learning. So they made slow progress in Latin before the Jesuits began to print books in Nagasaki or Amakusa by using a printing machine (*prensa tipográfica*) brought from Macao.

The textbooks used at the seminary remain unknown, however, it's conceivable that "*De Institutione Grammatica*" (1572) written by a Jesuit priest named Manoel Alvares (1526～82), "*Flosculi*" complled by Father Manoel Barrete, "*Dictionarium Latino Lusitanicum, AC Japonicomex Ambrosii Cale*" (1595) [that is, Latin-Portuguese-Japanese Dictionary compiled from the work by Ambrosio Calepino] were in general use in the Jesuit educational establishments in Japan. Especially "*De Institutione Grammatica*" was well received by learners soon after its publication in Europe and the schools belonging to the Society of Jesus adopted the book as a text book. Later on, all of these books were reproduced in Nagasaki and Amakusa.

The pupils had to observe the regulations prescribed by Valignano. They were to dress neatly, wearing blue unlined clothes indoors; however, they put on blue clothes and black cloaks when going out. Sometimes when they met kinfolk visiting the school, they were to wear blue clothes or silk clothes of other colours. Daily maids did their washing and sewing. They lived on rice, soup, fish and green vegetables. On Sundays or festival days, they were served dainty dishes or fruits. While at table they heard reading in Latin or Japanese. They usually slept under a coverlet on the *tatami*.

Candles were kept burning all night. The pupils took a hot bath every 2 days in winter, and had a cold bath in a river or in the sea in summer. Basically they were not allowed to go home except for unavoidable circumstances. Whenever they returned home, two persons in the service of the seminary accompanied them. Since they had no lessons on gala days; they took a rest or went for a walk.

They enjoyed eating snacks, for example, rice cakes or fruits. They were to attend Mass every day, confess themselves once a month, and receive Holy Communion four times a year.

The daily works for the pupils are as follows :

[the forenoon]

4 : 30 ····· rising, praying with fathers.

5 : 00 ····· Mass, later enjoy their leisure in the zashiki till 6 o'clock.

6 : 00～7 : 30 ····· Very young pupils learn basic words of Latin, while the rest learn lessons.

7 : 30～9 : 00 ····· show their homework to the Latin teachers. Upperclassmen correct the mistakes of the underclassmen.

9 : 00～11 : 00 ····· breakfast and rest.

[the afternoon]

11 : 00～2 : 00 ····· study the Japanese language, composition of letters and calligraphy using writing brush.

2 : 00～3 : 00 …… singing, practicing of musical instruments, and recreation.

3 : 00～4 : 00 …… go to Latin teachers and write sentences in Latin. Listen to the reading of Latin. The underclassmen read and write Latin. Freely spend the remaining time.

5 : 00～7 : 00 …… supper and recreation.

7 : 00～8 : 00 …… repeating of Latin lessons. The underclassmen practice in Latin or in Japanese writing.

8 : 00 …… reflection (examination of conscience), evening prayer, bed.

On Wednesdays and Saturdays, the pupils had a half holiday, enjoying their free time practicing musical instruments, reading and writing the Japanese language, taking a bath, hairdressing and so on. On Sundays or festival days, they took their rest at the villa. On foul days, they stayed indoors all day, taking their rest or playing musical instruments. During the hottest season they were to rest without taking lessons.

It seemed that everything went smoothly when the incident of Honnō-ji occurred suddenly on the 2 nd of June in the 10 th year of the Tensho (i. e. 1 st of July, 1582). Mitsuhide Akechi revolted against Nobunaga, who, having been wounded, killed himself. The fate of the castle and the town at Azuchi was also that of the seminary. The news of Nobunaga's death reached Azuchi at about 10 A. M. that day. General Akechi and his men went to Azuchi after the murder to seize Nobunaga's treasures; however, when they arrived at Seta in the south of Ōtsu, they had to hold back because the bridge was destroyed by a bailiff named Kagetaka Yamaoka.

So instead of going to Azuchi, Akechi and his troops went to Sakamoto in Ōmi where Akechi had his own castle. The news that the advance of Akechi's army brought the whole town of Azuchi to a state of panic. People feared that not only the castle but the town would be burned by the enemy. So the priests and pupils comprising of 28 men took refuge in *Okinoshima* (沖島), an island in the middle of lake Biwa, leaving their seminary in charge of some Japanese.

On the 6 th of June (i. e. 5 th of July, 1582), the troops under the command of General Akechi finally arrived at Azuchi. The castle was empty because everybody had run away. Soon after Mitsuhide occupied the castle, he began to divide the treasures hoarded by Nobunaga among his men. On the 8 th of the same montn (i. e. 7 th of July) Mitsuhide left Azuchi for Sakamoto. Since then the castle town of Azuchi became a horrible scene of disorder. The town was damaged most by burglars, plundering, highway robberies and murders.

Naturally the quaint building of the seminary attracted the attention of the soldiers. The seminary suffered the ravages of plundering and nothing but the bare walls and the roof remained because the soldiers took almost everything —— furniture, iron pots, sliding doors, windows, tatamis, and timbers preserved for building a Chapel——away from the seminary.

When Mitsuhide left Azuchi for Sakamoto, the castle and the town was entrusted to his nephew, Samanosuke Akechi. However, when it was known that Mitsuhide was completely beaten by the troops of Hideyoshi (1536~98), one of the generals of Nobunaga, in the battle of Yamazaki, on the border of Settsu and Yamashiro, he fled to Sakamoto, setting fire to the Azuchi castle on the 14 th of June (i. e. 13 th July).

Later the armies of Nobuo Oda (1558~1630), a second son of Nobunaga, entered the town of Azuchi. He set fire to the town to smoke out the remnants of Akechi's soldiers. It is said that the whole town was reduced to ashes then. Whether the building of the seminary was also destroyed by fire then is not clear. Because no records help us here. Anyway, this was the final fate of the seminary at Azuchi.

What awaited the priests and pupils thence was a constant change of residence. They first moved to Sakamoto from Okinoshima and then to Miyako. And in the 10 th year of the Tensho (i. e. 1583), they moved to Takatsuki, being invited by Ukon Takayama. Two years later, 6 or 7 sons of

respectable samurais joined the seminary. However, the seminary Takatsuki did not last long due to Takayama's change of territory.

In the 15 th year of the Tensho (i. e. 1587), an edict of Hideyoshi banished all the missionaries from Japan. However the priests confined to missionary work, hiding themselves in various parts of Kyūshu Island. Organtino and two Japanese Christians went into hiding on *Shōdo-Shima* (小豆島), an island (120 km. circum.) of the Island Sea. Occasionally they visited the houses of Christians in the 5 provinces nearest to Miyako.

Four of five pupils out of the 30 pupils were sent back to their homes. The rest escaped safely to Kyūshu Island or went home. Most of them chose to go with the priests, going towards the seminary in Arima, the only seminary in Japan then. In the 15 th year of the Tensho (i. e. 1587), both Azuchi seminary and Arima seminary were merged into one; however, the ban prohibiting Christianity issued by Ieyasu Tokugawa (1542～1616), the first Tokugawa Shōgun, compelled the closure of the combined seminary at Arima.

Therefore the seminary was transfered to Nagasaki. On the following year (i. e. the 18 th year of the Keicho, that is, 1613) the nation-wide ban of Christianity was proclaimed by the Tokugawa Shōgunate and the next year Ukon Takayama and his whole family were banished from Nagasaki (on the 8 th of November 1614). The exiles arrived in Manila on the 28 th of the same month. The educational work opened by the Jesuits was over this year.

In conclusion, I'd like to express my deep thankfulness to the British Library, Biblioteca Pública de Porto, Biblioteca Pública de Evora, Museo de Macao, Arquivo Histórico de Macao, university libraries of Sophia, Waseda, Senshu, the Toyo-Bunko Foundation, Historiographical Institute of Tokyo University, the Town Library of Azuchi and Kōbe City Museum for providing every convenience for the benefit of my research as well as for permission to print illustrations in my paper.

22 nd January 2004

Prof. Takashi Miyanaga